中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 12 号 第 1 巻（2012）193 ― 221 頁

TAT が映し出すパーソナリティの諸側面
―ロールシャッハ・テストとの比較を通して―

明治大学文学部　高瀬　由嗣

Personality Features Described in TAT: In Comparison with the Rorschach Method

TAKASE, Yuji (School of Arts and Letters, Meiji University)

This study explores the aspects of personality drawn out from analyzing and interpreting the stories of the TAT administered to two participants to whom other projective method, the Rorschach, is also carried out. As the results, the following findings are obtained. (1) There is no difference in their ability to grasp the layer of consciousness assessed by the response analysis between these two methods. (2) Each method focuses on the different domain of personality. The TAT specifies the cognition of the self and the others in their relations. While the Rorschach focuses on the basic cognition of and the coping styles to the circumstances. In addition to these findings, it is suggested that a great deal of thought should be given to an interaction between the nature of the test task and the personality of the participant, as a factor contributing to influence the expression of the layer of consciousness.

Key words: Thematic Apperception Test (TAT), the Rorschach, case study

Ⅰ　はじめに

TAT は被検者のパーソナリティのどのような面を映し出すのか。また，それは同じ投映法であるロールシャッハ・テストとどのような点で共通し，どのような点で異なるのか。おそらく，この問いに対して多くの臨床心理学者がまず思い浮かべるのが，シュナイドマンが 1949 年に発表した図であろう（田中，1996）。なかば定説でもあるかのように斯界に浸透したこの図の中では，ロールシャッハ・テスト，TAT，そして目録法という 3 種類の心理検査が，それぞれ潜水艦，船，飛行機に喩えられている。TAT の表象は船であり，それは海面下を潜航する潜水艦（ロールシャッハ・テスト）と，空を飛ぶ飛行機（目録法）のちょうど中間に位置している。船は海面下に船底を持ち，海上には甲板を有するため，それは海面下に相当する「無意識」，海面の「前意識」，海上の「意識」という 3 つの領域にまたがって航行する乗り物となる。それに対して，海面下の潜水艦として描かれたロールシャッハ・テストは主として「無意識」と「前意識」の領域を行き来し，空の飛行機に表象された目録法は「意識」の領域を飛び交う。つまり，TAT が映し出す意識の層は，ロールシャッハ・テストよりは浅く，目録法よりは深い部分ということになる。

被検者の視点に立つならば，それは，TAT の解釈は全般に受け入れやすく（意識化しやすく），ロールシャッハ・テストの方は受け入れがたい（意識化しにくい）と言い換えることもできる。しかし，筆者がこれまでに行ってきた両検査の解釈および被検者へのフィードバックの経験に照らすと，この考え方は単純に過ぎるように思われる。問題はそれだけではない。よしんばこの考えが正しいとしても，それは，単に両検査に反映される意識の層を図式化したにすぎず，これだけでは，2 つの検査が映し出すパーソナリティの様相がどのように異なるのか（もしくは共通するのか），そしてそのうち TAT はどのような面を浮き彫りにするのか，という根本的な問いに答えていない。この問いに真摯に答えようとするならば，同一被検者に対して実施された TAT とロールシャッハ・テストのプロトコルの共通点と相違点について実証的に検討していくしかない。

それではどのような方法をとるべきか。これには，両検査のプロトコルを一定の規則に従って分類し，その頻度や比率を検査間で量的に比較するやり方と，一つひとつのプロトコルを丁寧に分析・解釈し，その内容を質的に検討するやり方の 2 種類が考えられる。まず，前者の量的アプローチは，事前に具体的な仮説があり，なおかつそれ

に基づいた反応の分類法がすでに考案されているときに有効な手立てとなる。ところが，2 つの検査の関係性について何ら具体的な仮説を持たない現状においてはこの方法は適さない。そうなると本研究のすすむべき道は，おのずと後者のアプローチということになる。すなわち，検査の分析と解釈を主体とした事例研究を行ない，そこから両検査の関係性を丹念に検討していくという方法である。これは一見すると地味な方法であるが，両検査の性質をより細やかに理解するのにはもっとも確実なやり方であろう。このような背景から，本研究は同一被検者に対して実施された TAT とロールシャッハ・テストのプロトコルを取り上げ，その分析と解釈を通して，両検査が映し出すパーソナリティの諸側面の共通性あるいは相違性について検討することを目的とした。

実は，この試みは，鈴木（2002）が同一被検者に対して実施された TAT とロールシャッハ・テストの事例に基づいてすでに行っている。TAT の専門家であるばかりではなく，ヘルマン・ロールシャッハの『精神診断学』の訳者であり，ロールシャッハ・テストにも造詣の深い鈴木が，すでに優れた論を展開しているのにもかかわらず，筆者が同じ手法を用いて研究を行うのは，まさに屋上屋を架すものである。しかし，事例研究は積み重ねが大切である。より多くの事例にふれてこそ得られた仮説は真理へと近づくのである。さらに，筆者のようにロールシャッハ・テストを専門に研究を行ってきた者の視点は，あるいは TAT の専門家のものとは異なる，新たな問題を提起することに役立つかもしれない。このような考えに基づき，本研究は敢えて鈴木（2002）と同じ方法論をとることにした。

事例を提示するにあたって，被検者の生育史および家族歴は，プライバシー保護の観点から記載をいっさい控えた。また，問題歴（あるいは現症歴）に関しても，詳細な情報にふれるのは避け，概要を一文で紹介するにとどめた。しかしながら，本研究は実際のデータに基づいてそれぞれの検査の特徴を論じるという目的を持っているため，検査中の反応語に関しては，できる限り忠実に再現した。ただし反応中に語られた被検者に固有の体験，人名や場所，ある地方に特有の表現等に関しては，当人を特定できないように一部を改変するか，削除するなどの処置をとった。

Ⅱ　事例 1

Ⅱ－1　事例 1 の概要

検査当時，50 代半ばの男性（A 氏とよぶ）。妻が浮気をしているのではないかという非常に強い疑いを抱いている。知能は相当に高く，ウェクスラー成人知能検査では，言語性 IQ 115，動作性 IQ 123，全検査 IQ 120 という値を示す。

Ⅱ－2　TAT 反応およびその解釈

TAT は鈴木（1997）に従い，全部で 21 枚の図版を使用した。まず被検者の反応，ついで筆者の解釈を提示し，最後にはすべての図版を通したまとめを示した。なお，反応の分析および解釈方略は鈴木（1997）に基づいた。

【図版 1 反応】(10"－1'25")

子どもですね……音楽か……ヴァイオリンができなくて悩んでる……そんな感じですね。……(15 秒)……〈これから先はどうなるんでしょう？〉……うーん……努力してうまくなるのか……そのまま落ちこぼれるのか……やっぱり努力していくんでしょうね……(25 秒)……そんな感じですね。〈はい〉

【図版 1 解釈】

少年が楽器演奏の上達に行き詰まりを感じるという非常にポピュラーなテーマが語られる。それは，A 氏が一般的な反応を与えうる力，つまり，ある程度の常識性をもっていることを表している。ただし「落ちこぼれ」という表現は比較的まれである。それは，「落ちこぼれ」という言葉に対するこだわり―コンプレックス―を表しているのかもしれない。

【図版 2 反応】(10"－1'05")

両親がね，えー農作業を一生懸命やっていると……私はこれから学校へ行こうと……両親に申し訳ないなと……

まあ，そんなことですかね……まあ，そういった意味ではね……私も，もっと勉強しなければいけないなと……まあ，そんな雰囲気ですね。はい。……(10秒)……〈この後，どうなっていきますかー？〉……そうですね……まあ，平和な家庭っていうんですかね。なごやかな家庭のイメージを持ってますけども……〈はい〉

【図版2解釈】

A氏は前景と後景の異質性をきちんと捉え，それらをうまく統合した話を作っている。話のテーマも一般的であり，常識的な思考ができる人であることがうかがえる。ただし前景の女性を指して，何も前触れもなく「私」という言葉で表現したことは注目に値する。男性であるA氏が画中の女性にこれほどまでに強く同一化できるのはなぜか。それはA氏が女性的な傾向を持っていることを意味しているのではなかろうか。もちろん，このような思い切った解釈には他の図版に対する反応からの裏づけが必要であることはいうまでもない。それゆえ，今は一つの仮説として留めておきたい。

【図版3BM反応】(12"－1'25")

まあ，子どもさんでしょうね……何か，まあ，学校か……あるいは……まあ，そういった問題で悩んでいると……誰にも打ち明けられないで，ひとりで何をしたらいいのかっていう，そういった事で悩んでますね……〈どういった事で悩んでるんでしょうか？〉……自分の，まあ，思うようにならないっていいますか……そういった事で挫折をしたっていうか……まあ，やっぱり自分の思うようにならないっていうか……〈思うようにならない？〉ああ，たとえば希望を持ってても，希望どおりにいかないとか……そういった事でしょうかね。……〈いくつぐらいの子どもさん？〉……やっぱり，12，3ですかね……〈男の子？女の子？〉女の子。……そんなとこです。

【図版3BM解釈】

画中の人物に精神的な苦悩を見るのは一般的な反応である。したがって，ここからあまり多くのことは言えない。ここに至って明らかなように，A氏は一般の健康的な成人が与えるのと同じような反応を与えるだけの力を持っているようである。少なくともここまでの反応を見る限りは，A氏に重篤な精神疾患の存在を疑うことはできない。

【図版4反応】(10"－1'25")

まあ，夫婦でですね，なんか話し合いをしてるんだと思いますけども……まあ，主人と奥さんはうまくいってないような感じですね……奥さんのほうは，なんか，引き止めたいような感じですが，なんか，主人のほうは少し離れていくっていうか，そんな感じにとれますね……まあ，そうですね，この雰囲気からすると，そんなに，まだ主人と奥さんの関係は悪くないように見えますけどね……そんなところですね……はい……〈どんな話し合いをしてたんでしょうね？〉……どうなんでしょうねー，まあ，子どもの事とか……どうも，この写真を見ると，奥さんのほうが積極的というか……なんか，家庭のゴタゴタとか，そんなことをね，心配しているように見えますけど。

【図版4解釈】

男女の対立を読み取った反応であり，これも類型的な反応といえる。ただし「家庭のゴタゴタ」はA氏特有の表現である。A氏自身が家庭に何らかの問題を感じていることが，このような反応を与えさせる要因となったのかもしれない。

【図版5反応】(7"－1'20")

奥さんがですね，主人か子どもの部屋を覗いて……何かを……調べようとしているのか……普段は，まあ，そういった主人や子どもの部屋には，あんまり入らないけれども……多分……何かがあってね……まあ，そういった意味で覗いて，何かを探しだそうとしているのかなと……そんな疑いの状況がうかがわれますけれども，ええ。……ただね，奥さんにしてみたら……主人の部屋とかね，そういったところは平気で入れますから，そんなに遠慮して入る必要ないですから……ドアで不審そうに見ているところがひっかかりますね。……そんなところですね。

【図版5解釈】

この話は，普通の家庭の平和な一場面を表しているとは言い難い。その意味で，特殊な反応である。家族メンバーの部屋を「覗いて」，「何かを探しだそう」とする人物は，侵入的，暴露的な性質を帯びている。このようにかなり

特殊な意味づけのなされた人物像には，A 氏自身の姿が投影されている可能性が高い。すなわち，A 氏自身が相当に侵入的であり，他の人の秘密を暴きたがる性質を持っていることが推測される。

【図版 6BM 反応】(10"－1'10")

これは奥さん，あっ奥さんじゃなくて……お母さんと息子さんというイメージですかね。……〈奥さんと息子さん〉……夫婦のようには見られないので……まあ，お母さんという感じで……で，息子さんがですね，何かお母さんに話しかけていると……ところが，お母さんのほうは……息子の言うことについては，すんなりと理解ができないと，「私は知らないわよ」という，まあ，そんなイメージですかね……まあ，息子さんにしてみると，どうも，たとえば彼女ができたので「お母さん，なんとか，ひとつ結婚したいよ」とそんなふうなんだけども，お母さんにすれば「ちょっと賛成しかねるわよ」と……そんな事でしょうかね。ええ。

【図版 6BM 解釈】

母親と息子が，息子の結婚を巡って対立するというテーマは頻繁に出現するものである。また語られた内容の詳細を検討しても特に問題とすべき点は見当たらない。したがって，ここから多くのことをいうことはできない。

【図版 7BM 反応】(10"－1'20")

まあ，これは会社のですね，上司と部下というか……そういった位置づけでですね……えー，あまり，仕事の内容といいますか，商談といいますか，そういった事を大きな声で，こう話し合うところじゃないという気がするんで，なんか，こう声をひそめて話し合ってる……あんまり他人に聞かれたくないような話をしていると……ですから，相当こみいった話を 2 人で上司と部下がしていると……そんな感じを受けますけどね……はい。

【図版 7BM 解釈】

与えられた反応は，会社の上司と部下が仕事のことで密談するという非常にポピュラーなテーマである。これは，A 氏が男性どうしのオフィシャルな仕事場面を難なく連想しえたことを意味しており，それは彼が男性社会に参入しうる力を有していることを示すものである。

【図版 8BM 反応】(12"－2'15")

手術の場面ではなくて，なんか殺人というか……事件が起きてるというのか……うーん，起きてるんではなくて，どうも，この女性（手前）がですね……なんか，そういった想像をしていると……この男性（後景，横たわる人物）が……(咳払い)……悪者に襲われてですね……刺されていると……そういった悪い想像をしていると……そんな感じですかね……〈この人は女性なんですね。「はい」で，この人は刺されている。「はい」この人たちはどういう関係なんですか？〉……これは……どんな関係なんでしょうね……ある程度，冷静にものごとを想像しているところを見るとね，好きな男性がやられているという，そういった驚きの表情じゃないですから，何かしら，この男がですね……前に付き合っていたけども……何かよそおって冷静にものごとを見ていると……〈前に付き合ってた人？〉……ちょっと，それは（笑)……〈じゃあ，今の関係は？〉……今はそれほど深い関係ではなくて……かえって，もう離れたほうがいいような……邪魔なような扱いをされていると……そんな感じでしょうね。ええ。

【図版 8BM 解釈】

A 氏の語りは回りくどく，一見したところ何が言いたいのかわかりにくい。しかしよく読み込んでみると，前景の人物は，後景の「刺されている」人物と関係づけられ，その死を密かに想像するという，何とも殺伐とした反応であることがわかる。ここでは，前景の人物の抱く攻撃的な内容を帯びた空想（あるいは願望）は，恋愛関係の破綻（冷たくされたこと）に招来されたものとして正当化されている。また，後景の「刺されている」人物の痛みについては一切言及されていない。つまり，A 氏にとってこの攻撃性は自我親和的なものである。それは，愛情関係が破綻した際に，A 氏は相手に対して怨恨を抱きやすいこと，また，そういったときは攻撃性をあまり抑制せずに行動に移す可能性があることを示唆している。もちろん，このような可能性をたった 1 つの反応から強調するのはあまりにも早計である。言うまでもなく，他の反応がこれと同様のテーマを持っていたり，何らかの共通性を有していたりするときに，この推測がより確実なものとなることに留意しなければならない。

【図版 9BM 反応】(10"－1'15")

これは……グループでですね……どこかへ……この仕事か，農作業かなんかをしてですね……疲れはてて……こう，原っぱで寝そべって，まあ，休憩をしていると……で，この正面の人はですね，同僚のね，背中を枕にしているというところから関係すると，相当，こう，親分肌といいますか，部下にね，自分の枕になれよと，まあ，そんなような……しているような光景でしょうかね。ですから……ボス的な存在というか……まあ，親分というか……そんなところでしょうかねえ。

【図版 9BM 解釈】

農作業の合間の休憩というテーマは非常にポピュラーなものである。ただし，仰向けに寝そべる人物をわざわざ「親分肌」としているのは注目に値する。それはA氏が社会における上下関係に敏感であることを表していよう。しかしA氏の叙述をよく検討してみると，彼は「親分肌」の人物に必ずしも同一化していないようである。というのは，同僚（部下？）に対して「自分の枕になれよ」と命令することに否定的なニュアンスが込められているように読み取れるからである。つまり，彼は，あくまでも下の立場に身を置いているのである。それは，人間の上下関係には敏感でありつつも，無意識のうちに自らを下の方に位置づける傾向を意味しているのかもしれない。

【図版 9GF 反応】(10"－1'30")

食堂かどっかのウエイトレスが2人いますよと，ということで……そうね，なんか，こう，お客さんがいらして，すぐにね，まあ，そばに駆け寄ろうとしているのか……で，ここのマスターはですね，常日頃からですね，そういった接客，あるいは，お客さんが来たらすぐそこに行きなさいよと，そういった指導をされてますので，慌ててですね，お客さんのほうへ走って行こうと……まあ，そんなところを想像されるんですけども，はい。……〈2人ともウエイトレス？〉はい……〈こっち（下）はお客さんところへ走ってく〉はい……〈この人（上）はどうしてるんですか？〉まあ，2人の仲からすると，こちら（上）のほうが，まあ，先輩でですね……「あんた，さっさとやんなさいよ」というような……そんな存在感といいますかね……はい。

【図版 9GF 解釈】

ここにも図版 9BM と同じく，人間の上下関係が表現されている。しかも先輩から命令される方の人物について先に叙述していることから推測して，A氏はこの命令される側の人物に身を置いていることがうかがえる。それゆえ，これは先の 9BM から引き出された仮説（人間の上下関係に敏感でありつつも，無意識に自らを下方に位置づける傾向）を補強するものと見てよかろう。なお，図版1で「落ちこぼれ」に対してこだわりを示したのも，この傾向と無関係ではないであろう。

【図版 10 反応】(11"－1'20")

これ……お父さんですかね……まあ，子どもさんと……おやじさんと，子どもさんがですね……なんか，子どもさんが……泣いて帰ってきたと，で，おやじが，なんか，こう話をして，なだめすかしていると……そんな関係ですね。ですから親子というので非常に親密な関係ですよね……〈子どもさんというのは，男の子，女の子どちらですか？〉なんか女の子のイメージですね……はい……〈どんな事をなだめているんでしょうか？〉……まあ，そうですね……あのー，友達，近所の子どもさんと些細なことでケンカして帰ってきたと……そんな感じですね。

【図版 10 解釈】

A氏は，この図版においてもっとも一般的なテーマである，男女間の愛情や信頼を見ていない。それはどのような理由によるのか。あるいは，A氏は男女間の愛情関係・信頼関係を認めにくい人なのかもしれない。すなわち，A氏には異性愛を見ることに対して何らかの抵抗（あるいは抑制）が働いていると考えられる。

【図版 11 反応】(31"－1'10")

（A氏，図版の位置を確かめる）こっちでしょうか？〈そうです〉ああ……(31秒）なんか，こう，深いね，渓谷といいますか，山と山の間，そういった道の険しいところ，そういったところですね。まあ，崖くずれとか，そういった……起きたところで……まあ，自然の中なんですけれども……そういった中で，ここが何か・牛か馬かいるんですかね……まあ，そういったね，山あいの険しいところをですね，まあ，荷物を持って……行っていると……

〈荷物を持って？ 誰が？〉ええ，まあ，人とね……馬が……歩いて行くと……はい。

【図版 11 解釈】

図版の不気味な印象に圧倒されることなく，動物と人間をこの不気味な場面の中に見，無難な話を作り得たことは肯定的に評価できる。この反応を見る限り，ある程度の不安耐性を持った人と思われる。

【図版 12M 反応】(7"－1'10")

主人とね，これは，まあ，奥さんですかね……奥さんが，こう体を悪くして，今，ベッドに横たわっていますよと……で，主人が心配してですね……こう額に，こう，手をかけて，熟あるんだろうかとか，まあ，そういったことをね，心配してますよと……ただ，奥さんのほうは，こう，服装も，まあ……(聞き取り不能)……そんなに重病人ではないと思いますけども……〈奥さんのほうは何ですって？〉こちらですね。(A 氏，図版を指差す)……あのー，普段着のままね，ベッドに横たわってますので，そうとう重病なら，もっと，こう，布団をかけたりとか，なんか，してますんで，そんなに重いものではないと思いますけれども……まあ，簡単なですね，日射病といいますか……そんな病気でベッドに横たわっていると，そこを主人が心配してね，まあ，熱でもあるのかなと……まあ，そういったことでしょうかね。はい。

【図版 12M 解釈】

夫が，身体を悪くした妻を介抱するというテーマが語られる。A 氏が同一化しているのは，間違いなく奉仕的・献身的な夫の方である。このことを踏まえると，A は父性的というよりは，むしろ母性的な傾向が強い人のように思われる。それは図版 2 で推測された女性的な傾向と共通する。

【図版 13MF 反応】(12"― 1'15")

はい。主人とですね，あっ，主人と奥さんという……まあ……男性とね……男性と他の女性と，そういった関係でしょうかねえ……で，女性はですね，このように上半身が出ていますけども，そういったように情事のあとではなくて，男性はネクタイがありますので，そんな……情事のあとということじゃなくて……部屋で入ったところに女性がこう……意識がないというのか，死んでいるので，これはなんてこった，というような感じでですね，男性が，こう……悲嘆にくれているといいますか……ちょっと分かりませんねえ（小笑)。

【図版 13MF 解釈】

A 氏は明らかに画中に「情事」の後を見てとったが，あえてそれを否定している。すなわち性交を認めるのを回避したのである。このような回避が生じたのは，彼が性に対して抑制的であることを意味する。特に女性のあられもない姿に言及しつつも，真っ先に「情事」を否定したのは，女性が性に対して自由であることを認めたくなかったからかもしれない。言い換えるならば，A 氏は女性に対して性とは無縁の清いイメージを抱きがちなのであろう。なお，ここで導かれた解釈は先の図版 10 から得られた推測（異性愛を認めることへの抵抗）と共通するものである。

【図版 14 反応】(15"－50")

はい。まあ，昼間だというのにね，非常に暗い部屋にですね……まあ，住んでるんだと，で，働きにも行かずにですね，窓を開けて，天気の日にですね，まあ，外を眺めておると……なんとか……まあ，さみしい生活をしておると……そんな感じですね……〈男の人？ 女の人？〉これは男でしょうね。はい。

【図版 14 解釈】

ここでは，画中の人物が外の光景を眺めているということだけに留まり，特にストーリーらしきものはない。したがってこれは反応失敗に近い。ここから読み取れることはそう多くはないが，敢えていうならば暗い部屋に閉じこもり外を眺めるだけの「さみしい生活」とは現在の A 氏の心境を語ったものであろう。

【図版 15 反応】(20"－1'15")

これはお墓のね，ところなんですけども，ちょっと手のところにですね，ピストルか何かを……何かを持ったような感じもするんですけど……で……まあ，亡くなった方をですね，そうとう前から，こう，憎んでいたと……と

いうことで，えー，ある時ひそかにですね……ピストル持って，ピストル持って殺すということは……まあ，死んでるんですから……まあ，それにしてもね……死体であろうと，恨み骨髄といいますか，そういった意味で，恨みのひとつでもピストルで撃って，ウサをはらしてやると……そんな寂しいといいますか……心のね，持ち主であるなと……そういったことでしょうね。

【図版15解釈】

墓の中に眠る死者に対して恨みをはらすためにピストルを撃つという凄まじい反応である。すでに死亡した人にまでも「恨み骨髄」と表現していることは大いに注目すべきである。これは敢えて解釈するまでもなく，A氏の著しい被害感，執着性，そして攻撃性を表している。図版8BMから引き出された怨恨と攻撃性に関する仮説が，この反応によって補強されたといえよう。

【図版17BM反応】(9"－55")

男性がね……まあ，綱のぼりといいますか，まあ，そういったことをしておりますよと……で，私はもう腕には自信があってですね，まあ，腕だけでね，登り降りができますと……そういったことで，そのー，自信を持っておるし……えー，自慢しておると……まあ，そういった意味ではね，常日頃の，えー，腕にしても体にしてもね，非常に鍛練といいますか，まあ，訓練をね，続けているなと……やれば俺だって，誰でもできるよと，まあ，そんなことでしょうかね……はい。

【図版17BM解釈】

自己鍛錬はきわめてポピュラーなテーマである。ここでA氏の反応をよく読み込んでみると，その鍛錬は人に見せつけて賞賛を得ることを目的としているというよりも，むしろ自らの劣等感を補償するためのものであることがうかがえる。それは「やれば俺だって……できるよ」という言葉に暗示されていよう。思い切った解釈をするならば，A氏は，腕力や体力といった男性的な側面に関して自らに劣等感を抱いているのかもしれない。

【図版18BM反応】(13"－1'07")

喧嘩をしてるのか……酔っ払い，酔っ払いではないですねえ……まあ，酔っ払いならね，支えてやるということで，こう，腰のまわりに腕をまわしたりすることもありますけど，肩を取っていますのでね，なんか喧嘩をして，「まあ，まあ」ということで仲裁に，誰かが仲裁に入ってですね，「もう，いい加減にやめてくれ」と……そういった場面のように思われますですね……はい……ところが，この男性はですね……真剣な喧嘩ではなくて，「俺はどうでもいいんだ」と，なんかヤケッパチのような喧嘩をした，まあ，表情ですね（笑）はい。……まあ，そんなとこでしょうね。

【図版18BM解釈】

画中の人物の背後の手は，この人物の動き（喧嘩）を止めるものとして認知される。画中の人物が「どうでもいい」と「ヤケッパチ」になっているところは，A氏自身の行動傾向を表しているようである。つまり彼は自己統制を失い，自暴自棄な行動に走る危険性があることをうっすらと感じているのであろう。それゆえに自分の行動を止めてくれる他者の手を必要としているのかもしれない。

【図版19反応】(12"－45")

よく，あんまり分からないんですけどね。雪が降ってですね，相当つもっている，そういった情景でしょうかね……非常に雪が降って，寒い，殺風景なんですけど，ただ救いがあるのはですね，えー，ある家庭の中からね，窓2つが見えてですね，あったかい，そういった家庭がみられるなと……そんなところでしょうかね。はい。

【図版19解釈】

これは一見すると普通の健康な反応のように思われる。しかし，A氏の答えを詳細に検討すると，語り手の視点は「あったかい家庭」の内部にあるのではなく，外側の雪の降り積もる場所にあることが見て取れる。「あったかい家庭」の中で営まれる家族の生活にはいっさい触れずに，あくまでも外側から見た家庭の様子しか語っていないことが，その証左である。そしてこれが一般的な健康度の高い反応と決定的に異なる点である。ここに，安全基地としての家庭イメージがA氏の中にしっかりと根づいていないことが推測される。

【図版 20 反応】(10"－1'20")

まあ，夜ふけといいますかね，夜もふけて……仕事から帰ってくる男性がですね，働き疲れた，そんな感じで，まあ，家路に……急いでおると……あっ，急いでいるといっても……あんまり，そのね，さっさっさっと帰ってくような雰囲気ではないですから……なんか，こう，家に帰るにしても……気のすすまない……まあ，そんなことを思いながらですね……まあ，家路についておると……そんなところでしょうね。〈なんで気がすすまないんでしょうかね？〉……やっぱり，家庭に何かイザコザといいますか……そういったことが，やっぱり頭の中にあってですね……シックリしないと……そんなところですけども（笑)。

【図版 20 解釈】

家に帰ることに「気の進まない」人物が表現される。ここに至って明らかなのは，A 氏の家庭には「イザコザ」(図版 20）や「ゴタゴタ」(図版 4）が存在し，それは決して安全な場所ではない（図版 19）ということである。

【図版 12BG 反応】(8"－55")

森の中にね，川が流れておりますよと……〈何の中に？〉……森の中にね〈はい〉川があってですね……むかし使った舟か何かがですね……丘にあげられてですね……まあ，古くなっていますよと……えー，かつてはですね，この舟もいろんな形で利用されたけれども，だんだん古くなってですね，まあ，使い捨てと……そんな舟にしてみると，わびしいといいますか……人間は勝手なもんだなと……そんなとこでしょうかね……〈はい。お疲れさま〉

【図版 12BG 解釈】

A 氏は使い古され，捨てられた舟をみている。その叙述から明らかなように彼はこの舟に対して相当に感情移入している。それゆえに，この舟には彼の自己像が投映されているとみてよい。つまり，いま彼は自己疎外感や孤独感を抱くのとともに，自分を「使い捨て」た人々に対して「勝手なもんだ」と心の中で怨嗟の声をあげているのかもしれない。

【TAT 解釈のまとめ】

全図版を通して比較的類型的な反応が多い。また，奇異な言語表現や了解不能な内容はまったくといっていいほど見当たらない。少なくともこのことは重篤な精神疾患の可能性を否定するものである。むしろ，反応にある程度の客観性が保たれていることに注目するならば，現実吟味力は適切に機能していると言ってよい。

しかし反応内容を詳細に検討すると，いくつかの看過できないパーソナリティ特徴が浮かび上がる。まず注目すべきは，他者に怨恨を抱きやすい点である。また，いったんこの感情に囚われると，簡単には払拭できず，執着しやすい点も同様である（8BM，15，12BG など)。このような怨恨のベースにあるのが，おそらくは彼自身に潜在する非常に強い攻撃性であろう。この攻撃性はときに A 氏の手に余るため（18BM)，他者に投影され，彼自身にはそれが被害感となって体験されるのであろう。被害感が怨みつらみへと繋がりやすいのは敢えて説明するまでもない。

また，A 氏は人間どうしの上下関係に敏感であり，無意識のうちに自らを下の方に位置づける傾向がある（9GF，9BM)。腕力，体力など，いわゆる男らしさの面にあまり自信がなく，劣等感を抱きやすいのも，このことと決して無関係ではなさそうである（17BM)。彼はいわゆる男らしさに同一化するというよりは，むしろ女性への同一化の傾向が強く（図版 2)，その行動のあり方も献身，奉仕に特徴づけられた母性的なものである（12M)。

性に関しては抑制が強く，そのせいか異性との間に成熟した愛情関係・信頼関係を築きにくい（10，13MF)。このような抑制は，性に関するコンプレックス，換言するならば，男性性の獲得の不全がもたらしたものかもしれない（17BM，2)。

最後に家庭に対する認知・感情を取り上げる。A 氏にとって家庭は決して安心できるところではなく（19)，むしろ「ゴタゴタ」や「イザコザ」を生み出す場所のようである（4，20)。また A 氏は家族成員に対して，部屋主のいぬ間にその秘密を暴こうとするような，詮索的，侵入的，暴露的な行動傾向を顕著に示している（5)。以上を総合すると，男としての自信を十分に持てなかったこと，それゆえに妻との間にしっかりとした愛情関係，信頼関係を築けなかったこと，さらに被害的になりやすい性格傾向などの要因が絡み合い，妻が浮気しているのではないかという疑念へと発展していったと推察される。

Ⅱ－3　ロールシャッハ・テスト結果と解釈

A氏のロールシャッハ・テスト全記録をTable 1に，またそのスコアの要約をTable 2に示した。実施および分析法は片口（1987）に従った。なお，鈴木（2002）においては，テストの記号に基づく形式分析が省略され，主に継起分析・内容分析のみに焦点が当てられているが，本研究では検査の基本にのっとり，形式分析を継起分析と同等に扱うことを心がけた。

Table 1　A氏のロールシャッハ記録

	自由反応	質問	スコア
Ⅰ 1	(7"∧) 左右対称…下からコウモリが飛んでるのを見ている感じですね。そんなところですね‥もっとどんどん言うんですか？〈ご自由にどうぞ〉じゃ，ありません。(43")	目，頭，胴……左右は羽です。……飛んでるところを下から見たような感じです……〈他にコウモリらしい特徴は？〉手ですかねえ。	W FM± A P
Ⅱ 1	(20"∧) なんだろうね……なんか動物で，熊かなんか……子供が2匹ジャレあっているなと……そういったところですねえ。あとは，分かりません。(笑) (48")	ここは頭で，……耳と口……こっちは手……足……〈熊らしい特徴は？〉……格好が第一に熊らしく思えました……ユーモアみたいのも感じます。	D FM± A P
Ⅲ 1	(14"∧) 女性どうしで……バーゲン・セールで……何か品物を見つけて，「これは私のものですよ」と取り合いっこをしているような……恥も外聞もなく取り合いっこをしてる……そんなところですね。(46")	黒い部分の左右です……〈女性？〉胸だとか，ウエストが細いところとか……クツの感じも……これが品物で……2人で取り合いっこをしている……だから、これは女性の荷物というか，袋というか…	D M± H, Cg, Obj P
Ⅳ 1	(25"∧) 熊かなんかの毛皮を干してあるよと……そんなイメージでしょうかね……	頭……手……足……真ん中から開いてあるような……〈毛皮らしさ？〉…やっぱり頭があって……手とか足とか……それぐらいしか考えられません。	W F± Aobj P
Ⅳ 2	(∧) あとは，なんかですね……よく物語とかに出て来るような山の主がノシノシと手前に向かって歩いてくるような……。(1'40")	頭，手，足……大きな体でノシノシと手前に歩いてくるような……〈山の主？ 人間に近いもの？動物に近いもの？〉やっぱり人間に近いものでしょうね。……〈大きな？〉頭から足までの関係ですね……頭は小さくて，足は大きいからですね。	W M±, FK (H)
Ⅴ 1	(26"∧) 大きなワシかなんかがですね，空に舞い上がって迫ってくるというか…襲ってくるというか……前，映画で観たような感じを受けます。(1'06")	〈ワシ？〉左右の羽…大きな羽……頭……足の格好がワシのようですね……〈映画で観た？〉以前，ヒッチコックの映画で観たような……大きな鳥が人間を襲ってくるような感じがします。	W FM± A
Ⅵ 1	(1'30"∧) これはよく分からん…何とも想像つかんですね……分かりません……なんだろうな…蝶々のような感じもするんですけど，ちょっと不自然のような感じがします。(1'45")	頭，羽……やっぱり不自然なのは頭ですね……ここ (頭＝D2 領域) が飛び出ちゃってるので……イメージがわかないんですけど……	W F∓ A
Ⅶ 1	(8"∧) 幼い子供ですね……頭からすると，3歳か4歳の可愛らしい女の子が何か話し合ってるような……それぞれの家庭の自慢話でもしてるんでしょうかね……「私はこんなの買ってもらったわよ」なんて話でもしてるんでしょうか。(1'00")	顔で……頭にリボンか何かつけて……これは手というか，蝶々かなんかをあしらった帯というか…〈子供？〉顔のイメージからですね。……ちょっと下半身が不自然ですね……岩の上にでも乗ってるような感じでしょうか。	W M∓ H, Cg, Na (P)
Ⅷ 1	(12"∧) 左右にイノシシが岩の上に登っていこうと……そんな感じですね。(35")	足4本……頭……これ全体が岩です。〈イノシシらしさ？〉頭とか足の感じからです……〈岩？〉……やっぱりイノシシはそのような山岳地帯にいるだろうなということで…	W FM± A, Na P
Ⅸ 1	(15"∧) 正面に……馬の顔がこっちを向いているような……そんなとこでしょうかね……	〈馬？〉鼻の感じとか……こう言った形が馬のように見えます……特に鼻の穴の感じからでしょ	dr F± Ad

	(46")	うか……正面を向いているような感じですね。	
X 2	(20"＜) 何か，この……歯にバイキンが左右から襲ってくるような……そんな感じですね。(1'02")	ここらへんが白い歯……そして歯茎。……青いのと黒いのがバイキン。バイキンでも青いのは，いいほうのバイキンで黒いのは悪いほうのバイキンのような印象ですね……〈歯や歯茎らしさ？〉なんとなくそう思いました。〈バイキン？〉やっぱり形でしょうかね。	W FM∓ Hd, Bacteria

Table 2　A 氏のロールシャッハ要約表

R (total response)		11		W：D		8：2		M：FM	3：5
Rej	Rej	0	0	W %		73 %		F % / ΣF %	27 / 100
	Fail		0						
TT (total time)		10' 11"		Dd %		9 %		F＋% / ΣF＋%	67 / 73
RT (Av.)		1' 01"		S %		0 %		R＋%	73 %
RT_1 (Av.)		0' 24"		W：M		8：3		H %	36 %
RT_1 (Av.N.C)		0' 31"		E.B	M：ΣC	3：0		A %	55 %
RT_1 (Av.C.C)		0' 16"			FM＋m：Fc＋c＋C'	5：0		At %	0 %
Most Disliked Card & Time		VI			Ⅷ＋Ⅸ＋Ⅹ/R	27 %		P 個 (%)	5.5 (50 %)
		1' 30"							
Most Disliked Card		I		FC：CF＋C		0：0		Content Range	3
修正 BRS		－16		FC：CF＋C：Fc＋c＋C'		0：0		Determinant Range	3

【形式分析】

ここでは，まず A 氏の適応水準（言い換えるならば病理水準）を検討する。この判定にあたって第一に注目すべきは，R＋%である。何となれば，これは A 氏の現実吟味力や自己統制力の程度を端的に表しうる指標だからである。A 氏の場合は，この値が 72.7%を示しており，かなりの高値といえる。さらに，常識的なものの見方，捉え方を反映する P 反応が，A 氏にあっては 5.5 個と，健康な成人の平均（高瀬，2006）を上回っている。そもそも，プロトコルの中にまったく了解不能な反応，病的な表現のなされた反応は 1 つも見当たらない。これらのことは，A 氏の現実吟味力，自己統制力が適切に機能していることのみならず，常識的なものの見方・捉え方ができるため，十分に適応的な生活を送れる力を有していることを表している。このように，ロールシャッハ・テストの結果は，精神疾患の可能性を否定する。

しかしながら，A のプロトコルにまったく問題がないわけではない。その最たるものが体験型であり，ここに示された特徴は A 氏のパーソナリティの偏りを浮き彫りにする。体験型を構成する 3 つの指標は，いずれも内向型を示している。そもそも A 氏には色彩，無彩色，陰影材質反応等，サイコグラムの右側に位置する記号がひとつもない。あるのは人間，動物という 2 種の運動反応と純粋形態反応のみである。さらに，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹの多彩色図版に対する反応数も多くない。これが意味するところは，A 氏はいかなる刺激に接しても，それに影響を受けることが少ないということである。すなわち，彼は現実の事物にはあまり反応せず，むしろ運動反応に代表されるように空想や想像といった個人の内的な世界に没入する傾向がかなり強いと言えるであろう。

ところで，反応決定因のレパートリー（Determinant Range）が 3 種類ときわめて少ないことは改めて強調しておく必要がある。これは，A 氏のものの見方・捉え方があまりにも狭く，柔軟性に乏しいことを示している。つまり，A 氏は日常の中で接するさまざまな出来事について，いったんある見方に囚われると，他の見方ができにくくなる傾向があるのかもしれない。このことに加え，反応内容もたった 3 種類しかないことも指摘しておかねばならない。もちろん，反応数がわずか 11 個しかないことは加味しなければならないが，A 氏ほどの高い知能を有する被検者が，一般的な健康な成人の平均をはるかに下回り，たった 3 種類の内容しか見られなかったことは大いに注目すべきである。これらのことは，A 氏の知覚の硬さを表すのみならず，興味・関心の幅がきわめて狭いことを意味している。言い換えるならば，彼の住む世界はたいへんに狭いといえよう。

【継起分析】

Ⅰ図版は7秒で，「コウモリ」という平凡反応を与えることに成功している。A氏は新奇の場面においても，さほど混乱することなく，適切に自分の行動をコントロールするだけの能力は持っていると言えそうである。

Ⅱ図版でも，やはり平凡反応を与えている。形態の説明も適切であるし，「2匹でじゃれあっている」というテーマにも問題はみられない。しかし，赤色刺激をまったく取り入れなかったのはなぜか。その1つの可能性として，感情刺激を回避する傾向を指摘しておきたい。

Ⅲ図版の反応は特異である。A氏がここで比較的良質な人間平凡反応を与えたことは肯定的に評価できるが，その内容には彼のパーソナリティを映し出すさまざまな特徴が表れている。まず，男性である彼が図版中の女性像に過剰に同一化し，女性がモノを取り合う姿を，あたかもわがことのように語っていることは大いに注目すべきであろう。ここから，A氏の女性に対する同一化の強さ，敢えて言うならば女性的な行動傾向が推測されるのである。このことに加え，彼自身も半ば意識しているように，「恥も外聞もなく取り合いっこ」するのは，彼自身の日常的な姿なのであろう。すなわち，ここにA氏の並外れた所有欲の強さを垣間見ることができる。

Ⅳ図版への2つの反応は，平凡反応，あるいは平凡反応に準じるほど高頻度で出現する反応である。内容に関しても特に問題はない。「毛皮」という内容から材質反応が期待されたが，A氏は陰影について特に指摘しなかった。だからと言って，これを取り上げて殊更に問題にする必要もないであろう。

Ⅴ図版はその反応テーマに注目したい。A氏は，ここで「ワシが襲ってくる」という内容を与えた。このように「襲ってくる」とわざわざ表現したところに著しい攻撃性が見て取れる。この表現は一見すると被害的である。しかし攻撃する「ワシ」を見ているのもA氏に他ならない。すなわち彼自身が潜在的に攻撃する人であるからこそ，攻撃されることに敏感なのであろう。つまり，これは彼自身の攻撃衝動の投影と理解される。そう考えるならば，この反応には，ふだんは表に出ない攻撃性と，その裏返しとしての被害感が表れている。

Ⅵ図版は，全10枚の図版の中でもっとも反応時間が遅延した。しかも，相当に悩んだ末，A氏はやや形態質の落ちる「蝶々」という全体反応を与えた。なぜ，彼はこのような反応を与えざるを得なかったのか。それを読み解く鍵は，質疑段階におけるA氏の「ここ（頭）が飛び出ちゃってるのでイメージがわかない」という言葉の中にある。つまり，A氏はD2領域（頭の部分）の処理に困惑したのである。それほど困惑したのであるならば，D2領域を反応の中に取り入れないという方法もあった筈である。しかし，Ⅱ，Ⅲ図版では難なく赤色領域を排除することのできたA氏が，この図版でそのように対処できなかったのは，彼がこのD2領域に強くこだわったからであろう。D2領域が男性性器を連想しやすい形を有していることから大胆に推測するに，彼は男性性器（＝男性性）に対するこだわり，言い換えるならばコンプレックスがあるとは言えないであろうか。

Ⅶ図版に対する反応は，明らかにⅢ図版と共通している。女性の世界に過度に同一化している点は，先にも述べたように彼が女性の世界に親和性が高いことを意味する。また，図版中の人物が自らの所有物を誇示している点は，彼の所有欲の強さを如実に物語っている。

Ⅷ図版はまたしても色彩のいっさい関与しない運動反応である。どれだけ鮮やかな色彩に接しても，A氏はまったく動かされることなく，それまでの反応パターンを淡々と貫く。ここにきて，内向的な傾向がよりはっきりと表れている。

Ⅸ図版は，色彩も形態も曖昧であるため，全10枚の図版の中でもっとも反応を与えるのが難しいと言われる。しかし，A氏は中央のdr領域に，比較的質の良い「馬の顔」という反応を難なく与えている。A氏は，このように図版の一部分を任意に切り取って答えを与える力を持っているのである。それを思えば，Ⅵ図版でD2領域を排除できなかったことから導き出された解釈がより確からしくなってくる。

Ⅹ図版には，少々質の低下した反応が与えられる。しかも，A氏にしては珍しく独自性の高い反応である。それゆえに，ここにはA氏の特徴が色濃く反映されていると見てよかろう。さて，彼が与えたのは，またしても「襲ってくる」という内容である（cf. Ⅴ図版）。これは，彼が人間関係を「襲う」「襲われる」という軸で捉えやすいこと，それは取りも直さず彼の内に強い攻撃性が潜んでいることを表している。

【ロールシャッハ・テスト解釈の要約】

形式分析・継起分析をまとめると，以下の特徴が明らかになった。まず，A氏は現実吟味力が保持されており，常識的に物事を理解する力を有している。少なくともロールシャッハ・テストの結果を見る限りでは，A氏に重

篤な精神疾患，あるいは発達の障害を推定することはできない。

しかしながら，A 氏は極端な内向型であり，現実の事物に関心を示すというよりも，むしろ自らの空想・想像の世界に遊ぶ傾向が強い。物事の見方は一面的であり，柔軟性に乏しい。したがって，いったん思い込みが形成されると，なかなかそれを変えることはできない。

反応内容に注目すると，女性への同一化が著しく，ここから彼が女性の世界に親和性が高いことが読み取れる。また，並外れた所有欲を有しているようである。このことに加え，図版の一部の形態にこだわりを見せたことから，自らの男性性に関して何らかのコンプレックスを持っていることが推測される。

彼は内面に強い攻撃性を抱えているが，ふだんはそれが抑圧されているのか表には出にくい。しかし，ときにその攻撃衝動は自らから切り離され，外界に投影されることもある。それが被害的な空想となって体験されるのであろう。

Ⅱ－4　事例 1 のまとめ

ここでは，ごく簡単に 2 つの検査の解釈結果を，両検査に共通した面，それぞれの検査に独立に認められた面をまとめてみることにする。

【TAT とロールシャッハ・テストに共通した面】

⑴　現実吟味力はある程度は適切に機能している。

⑵　強い攻撃性が存在する。ときにそれが他者に投影され，当人には被害感となって体験される。

⑶　性同一性の確立に何らかの問題がある。すなわち，自らの男性性にコンプレックス（劣等感）を抱いており，どちらかと言えば女性的にふるまいやすい。

【TAT のみから引き出された情報】

⑴　他者に怨恨を抱きやすい，またその感情に囚われるとそこに執着しやすい。

⑵　人間どうしの上下関係に敏感であり，無意識のうちに自らを下の方に位置づける傾向がある。

⑶　性について回避的，あるいは抑制的な傾向がある。

⑷　異性との間に成熟した愛情関係・信頼関係を築きにくい。

⑸　家庭は安心できる場所ではない。すなわち家庭が安全基地としての役割を果たしていない。

また，必ずしも裏づけは十分とはいえないが，TAT からは以下の特徴も見出された。

⑹　献身，奉仕に特徴づけられた母性的な行動をとりやすい。

⑺　詮索的，侵入的，暴露的な行動をとりやすい。

【ロールシャッハ・テストのみから引き出された情報】

⑴　現実の事物にはあまり反応せず，むしろ空想や想像といった個人の内的な世界に没入しやすい。

⑵　ものの見方・捉え方があまりにも狭く，柔軟性に乏しい。いったんある見方に囚われると，他の見方ができにくくなる。

⑶　興味・関心の幅がきわめて狭い。

さらに，ロールシャッハ・テストからは弱いながらも次のような解釈も導き出された。

⑷　動揺をきたさないために，感情を揺さぶられるような刺激を回避する。

⑸　並外れて強い所有欲を持つ。

以上を見てわかるように，TAT とロールシャッハ・テストが引き出したパーソナリティ特徴には，共通する面が複数あった。これは，両検査がともにパーソナリティのまったく異なる側面に光を当てたものではないことを示している。

次に，それぞれの検査が単独で明らかにした面を見ていくと，TAT には人間どうしの関係性のあり方や，その関係の中で彼が体験しがちな感情などが映し出されているのに対して，ロールシャッハ・テストは外界の認知の仕方，あるいは外界に対する対処方略などが表れていることが確認できた。これを両検査の特徴と単純に見なしてよいか否かは，次の事例 2 の結果を待つことにする。

Ⅲ　事例 2

Ⅲ－1　事例 2 の概要

検査当時，30 台前半の男性（B 氏とよぶ)。トラウマティック・ストレスにより PTSD 様の症状を呈している。ウェクスラー成人知能検査では，言語性 IQ 112，動作性 IQ 87，全検査 IQ 101 という結果を示す。

Ⅲ－2　TAT 反応およびその解釈

事例 1 と同じく，まず個々の反応とその解釈を提示し，最後にまとめを示した。なお，被検者は反応の中で，幾度かにわたって自らのトラウマ体験についてかなり詳細に言及している。これらは，冒頭でも断ったとおり，すべて削除した。また，解釈に際して，この体験を取り上げざるを得ない場合は，その具体的な内容にはふれず，「過去の体験」あるいは「過酷な体験」という言葉で一括することとした。

【図版 1 反応】(15"－1'25")

いいですか？〈はい。どうぞ〉……まず，この子どもは両親が大切にしていたヴァイオリンを壊してしまった。〈はい〉そして，どういうふうにして謝ろうと，まあ，どういう風な言い訳をしようかと，あのー，悩んでいると……そういうふうに受け止めました。〈はい〉……〈幾つぐらいの子どもですか？〉えー，12，3 歳ぐらいでしょうか。〈うん〉……〈これから先はどうなりますか？〉えー，父親，母親に正直に言って，まあ「ごめんなさい」と謝って，あとは，もう，どういうふうに怒られるか，というとこでしょうか。……〈はい。他に何か付け加えることはありますか？〉まあ，物凄く高価なヴァイオリンであったと……あの，ストラディバリウスのような逸品，名器というような……それぐらい悩みが深いような感じが受け取れます。

【図版 1 解釈】

類型的な反応である。その意味では，B 氏はある程度常識的にものごとを捉えることのできる力を有しているといえるであろう。しかし，反応を一読してわかるとり，少年はヴァイオリンを自らのものとして所有してはいない。それは，決して手の届かぬ高嶺の花（ストラディバリウス）なのである。ここに彼の自己矮小感，あるいは無力感が表れていると解釈される。この自己矮小感・無力感はただ「怒られる」のを待つだけの少年像にも表れていよう。ところで，この反応を別の視点から捉えるならば，両親は，高価な名器を所有しつつも，それを決して子どもに与えない人たちであると読むことができる。それは，彼が抱く保護者像を表しているのであろう。

【図版 2 反応】(22"－1'35")

うーん……結構，難しいですね。……農作業中の農夫の夫妻ですね。奥さんは木にもたれて休憩をしている。で，旦那さんは，馬を引いて，まあ，畑を耕すなり何なりしている。そこへ娘さんが学校の帰りに立ち寄ったと……そういったような風景に感じられます。……〈娘さんと農夫の夫妻というのはどういう関係でしょうか？〉親子……で，たまたま，学校の帰りに畑を通ったもので……この奥に家がありますでしょ。その家が家で，まあ，畑で作業しているお父さん，お母さんに声を掛けにきたと，まあ，「今，帰ったよ」という感じ。……自分自身，家庭がないものですから，どうしてもそういうふうな形に見えてしまいますね。〈はい〉

【図版 2 解釈】

この反応において B 氏は，図版に描かれた人物を「家族」として一括して扱い，前景の都会的で知的な雰囲気を持った人物と，後景の素朴で肉体的な人物との異質性を捉えきれていない。図版の要請に十分に答えていないという意味で，これは反応失敗に近い。このことは，B 氏の家族関係，あるいは家族関係をベースとして作り上げられる人間関係の貧しさや希薄さを表しているようである。いみじくも「家庭がない」という B 氏自身の言葉がそれを言い当てている。

【図版 3BM 反応】(3"－1'30")

うーんと，これは思春期の年頃の女の子で，まあ，学校でどうしても耐えられないような，あのー，例えば失恋にあったとか……ということで……まあ，自分の自宅のソファーのとこで，まあ，泣き崩れていると……そういう

ような感じに受け止められますけど……。〈その後，どうなりますか？〉まあ，徐々に失恋の痛手から立ち直るしか道はないですね。ただ，気になるのは，ここに何かドアが壊れたような破片みたいなものが見受けられますよね。ピストルみたいなものですね。これがちょっと気にかかりますよね。外国ではよくある話ですからね，ピストルで自殺したりする話は。……なんか，そういうふうに見えたりしますもので，それがちょっと気になります。日本の話であるか，外国の話であるか，分かりにくいんですけども，もし外国の話であれば，これはピストルのような形で，まあ，自殺を考えているというか……した後には見えませんね。する前というか，そういうような感じも受けられます。

【図版 3BM 解釈】

B 氏は，女性の苦悩の原因を失恋とみなしている。このような反応を与えた背後には，若い女性にとっての重大事といえば恋愛であるという思いがあるのかもしれない。つまり，これは B 氏の女性観を表しているといえよう。なお，この図版で自殺について言及するのは決してまれなことではない。したがって，ここから自殺念慮を云々することはできない。

【図版 4 反応】(10"－1'55")

これは……うーん……どうも顔つきからいって，まあ，夜遊びに行く旦那さんを止める奥さんというか……これから一杯飲みに行くとか，友達と遊びに行くとか，というのを引き止める，もしくは「私も連れてって」と……。そういうような風景に見られます。……〈うん。夫婦ですね〉はい。……どうしても家族がないもので，そちらの方へ，あのー，ひっつけてしまいますもので……自分自身，孤独な身なもんですから。

【図版 4 解釈】

男女間の対立状況を認めている点できわめて一般的であり，ここから特別な意味を見出すことはできない。

【図版 5 反応】(15"－1'55")

これは……うーんと……部屋を覗きに来ているような感じですね。〈うん〉……まあ，息子さんか，娘さんが留守の間に，この部屋で何か変わったことがないか心配になって様子を見に来ている。まあ，これはちょっと頭が白いから，お婆さんぐらいなような感じを受けるんですけども。……それ以外にちょっと思い浮かばないですね。……何か，変わったことがないか探りに来ているというか（笑)……よろしいですか？〈はい〉

【図版 5 解釈】

「何か変わったことがないか覗きに来ている」というのは，かなり暴露的な性質を表している。この人物が部屋を覗きに来た理由を「心配になって」という形で正当化してはいるものの，わざわざ部屋主の留守中を選んで来訪しているところに注目するならば，相当に侵入的であると言わざるを得ない。これは B 氏自身の姿を表していると見て間違いはなかろう。つまり，B 氏自身が暴露的，侵入的な性質を持っているからこそ，このようなテーマの反応が与えられたと言えるのである。

【図版 6BM 反応】(7"－1'15")

これは，母親に，えー……何か怒られている息子……のような感じがしますね。……どうしても家庭的な方向へ憧れがあるもんですから，そちらへ持っていってしまいますもので。なんか，そんな気がします。〈うん〉……〈どんなことで怒られているんですかね？〉まあ，あんたもいい年して，いい年してるんだから大概にしなさいと。〈うん〉まあ，たとえば……そのー，まあ，どういうことでしょうかね。自分に当てはめると……そういう同じようなことを繰り返していないで，あのー，ちゃんと立ち直って……しなさいと……そういうような……感じを見受けられますね。自分に置き換えることぐらいしかできませんので，想像の範囲がちょっと狭いですからね（笑)。

【図版 6BM 解釈】

B 氏はここで母親から一方的に怒られる子どもの姿を見ている。子どもには母親に反抗する意志や行動をいっさい示さず，ただ母親から「怒られる」だけであるところが独特である。これは図版 1 で，ただ怒られるのを待つのみの少年を彷彿とさせる。すなわち，B 氏の自己像は相当に萎縮し，母親に反抗するだけのエネルギーが枯渇しているようである。あるいは，たびかさなる両親の怒りが彼を去勢したと言うこともできよう。

【図版 7BM 反応】(6"－48")

これは，父親らしき者と話をする，これは息子ぐらいですね。……えーっと，どういう話をしているかというと，まあ，「最近，どうだい。うまくいってるかい」というような感じで。よく外国映画にあるような感じで。なんていうか，うーん，「ワイフとはうまくいっているかい」(笑) というような，そんな穏やかな表情がこの老紳士の方に見受けられますもので。……なんか，そんな感じで，穏やかな話をしているような感じが見受けられます。

【図版 7BM 解釈】

父親と息子が日常的な会話に終始するというテーマは，あまり一般的なものとはいえない。というのも，鈴木(1997) に照らせば，この図版では 2 人の人物間に何らかの真剣なやりとりを見るのが圧倒的多数だからである。男どうしの真剣なやり取りを感知できなかったのは，男性としての同一性がいまだ十分に確立されていないことを表しているのかもしれない。

【図版 8BM 反応】(8"－2'20")

これは手術をしているような……いや，これは手術じゃなく，何か人を人為的に傷つけているような感じがします。それに手前にピストル……ライフルのような，引き金はないですけどもライフルのような……あっ，引き金はもっと根元ですものね。……ライフルのようなモノも見えますし……この青年……青年でしょうか，これは。〈うん〉青年が，あのー，過去に携わった，その，嫌な記憶ですね。……そのー，自分自身が立ち会った嫌な記憶。これは腕を切り落とされたようなアレにも見えますね。……何かそういう嫌な現場にむかし立ち会って，その記憶から逃れられずに苦悩している青年というか……そういう自分自身ダブるところがあるものですから。〈じゃ，この風景 (後景) というのは，この人 (手前) の記憶なんですね〉過去に……そのー……実際に体験したこと。……自分自身にもあるんですよ，いやな過去が。……(註：ここで被検者はかなり詳細に自らの体験を語り始める。その内容は，彼のプライバシーにふれる恐れがあったため削除した。)……だから，どうしても，そういう暗い過去を背負った青年というイメージが，この絵から浮かんできます。〈わかりました〉それをどうしても払拭できないでいる。……今の私と一緒です。

【図版 8BM 解釈】

B 氏はこの図版に描かれた加害行為に少なからぬ衝撃を受け，自らが受けた苦痛に満ちた体験が蘇ってきたようである。反応の後半は，物語を作るという課題を忘れ，自分の体験談を語り出す始末である。そればかりか，画中の人物が手にする照明器具を「片手を落とされた」と誤認までしている。これは，B 氏が刺激にあまりにも翻弄されたため，自らを律して適切な反応を与えることに失敗したことを意味する。すなわち，彼は不安耐性がきわめて低く，不安が喚起されるような場面では混乱をきたしやすいことが予想されるのである。絵柄に触発されて，「払拭できない」過去の体験が蘇り，混乱をきたす様子は，PTSD に特有のフラッシュバックを彷彿とさせるものである。

【図版 9BM 反応】(10"－1'45")

これは，なんか大勢の者が奴隷かなんかで連れて来られて，作業させられて，つかの間の休憩時間を楽しむというか，楽しんでいるようなふうでもないですね。なんか場合によると，大量虐殺された場面のような印象も受けますが，ひとりだけ，真ん中の人物が，この人物が寝ているような感じに見受けられますし，周りの人物からはちょっとした苦悩，苦悩というか苦悶の表情みたいなものも感じられますし，これはちょっと何ともいいがたいアレですね。とにかく，そのー尋常でない連中が，まあ，のっぴきならない (笑) 事態であると。……大量虐殺されたか，もしくは，よければ，いい方であれば奴隷たちがつかの間の休憩時間に草むらでお互いに横たわっていると。でも，人の背中にのっていますからね。どうしても，やっぱり前者の方へいってしまいますね，考えがね。……〈前者っていうのは虐殺の方？〉みたいな感じ。……あの，人の腰の上に頭あったりして，寝るという状況ではちょっと考えられにくいなと思いましたもので。

【図版 9BM 解釈】

B 氏は奴隷の強制労働におけるつかの間の休息という比較的ポピュラーなテーマで話を作り始めるが，やがて男たちが草むらで横たわる姿から「大量虐殺」という陰惨なテーマを連想したようである。当初はこの「大量虐殺」のテーマは抑制されていたが，図版の刺激によって不安が喚起され，抑えがきかなくなり一気に噴出したものと考

えられる。そのように考えるならば，これは図版 8BM での推測（不安耐性が低く，不安を喚起させる場面で混乱をきたしやすいこと）を裏づける反応とみてよい。

【図版 9GF 反応】(13"－1'05")

これはなんか映っているんでしょうか。違いますね。持ってるものが全然違いますから，誰か走っていく人に向かって，何か声を掛けようとしているというか，慌てて走っていってる人に……何か下の人が身分が高そうな人で，上から声を掛けようとしている人がメイドさんか，そんな感じの人で，「忘れ物ですよ」とか，そういう感じに見受けられますね。……窓の上から急いで走っているお嬢さんか誰かに向かって，「忘れ物ですよ」と，いうような感じを受けます。

【図版 9GF 解釈】

B 氏は画中の 2 人の人物に対して，身分の違いを見出したものの，特にその性格の違いについて言及した訳ではない。むしろ，2 人とも一括りに扱っているのである（それは，当初，一方の人物がもう一方の鏡映像であると見なそうとしたことからも裏づけられる)。また，B 氏はいずれの人物の側にも身を置いていない。このことは，女性への同一化の弱さ，言い換えるならば B 氏が女性の世界からほど遠いところで生きており，女性に対する理解や共感が乏しいことを意味しているようである。

【図版 10 反応】(8"－1'27")

これは何かにひどく傷ついた息子ないし娘が，親に，胸で泣いているというか，辛かったことを訴えているような感じが見受けられます。で，その親の方もしんみりとした顔，表情をしてますので，やっぱり深刻な問題で，ものすごく悲しいことがあって，そのことに関して，ただ，まあ胸を貸してやることぐらいしか出来ないといったような感じに見受けられます。〈深刻なことって，どのようなことなんでしょうね？〉たとえば旦那さんが死んだとか，まあ，それぐらい重要な感じですね。どうも深刻な感じです。背景に黒が多いということは，やっぱり，それだけ暗いイメージがあるものですから，どうしても，なんか深刻な顔してますから，2 人とも，それぐらい辛いことがあったと思うんですね。

【図版 10 解釈】

ここでは，もっとも一般的なテーマである男女の愛情関係・信頼関係が見られていない。B 氏が見たのは，辛いことを親に訴える子どもとそれを受け止める父親の姿である。そして，彼が同一化を示したのは明らかに子どもの方である。これらから，B 氏は男女の間の深い愛情や信頼関係を見るまで成熟しておらず，むしろ親に窮状を訴えて庇護される子どもの側にいまだに身をおいていることが考えられる。

【図版 11 反応】(20"－1'33")

これは，うーん……うーん……大きな滝があって，その脇の細かいこれ（「竜」の部分）は，たぶん人影だと思うんですね。〈人影？〉はい。……だから人間が突き進んで，道なき道を突き進んでいってるような感じがするんですけど，そこで，これ（「牛」の部分）はハゲタカに見えるので，たとえば，そのー，山の細い道をつたい歩くのを落ちた人間に群がっているハゲタカであるとか，そういったような印象を受けますね。これ（図版下部の「道」）も道みたいに見えますからね。……だから，これが滝で，で，ずっとこの細い道がずっと，こう，本当に細い山道があって，それで誰か落ちた人間に対して，このハゲタカみたいに見えますよね，これね。鳥が群がっているように。だからハゲタカが群がっているような感じを受けます，この絵は。……どうしても，そういう死んでしまう方向へ結び付けてしまいます（笑)。

【図版 11 解釈】

B 氏は，比較的多くの人が「竜」に見る部分を山の細い道に見立て，その道から転落した人間にハゲタカが群がるという何とも恐ろしい場面を見ている。このようなテーマ設定はきわめて珍しく，それゆえにここに B 氏の特徴が表れているといえよう。反応を一読してわかるとおり，B 氏が画中に知覚した人間の受難は尋常なものではない。それは相当に強い自己破壊的な衝動を反映しているように思われる。

【図版 12M 反応】(15"－42")

これは，何か，起こそう，あっ，寝ている，これは老婦人でしょうか。老婦人に，旦那さんが起こそうかどうかとためらっている瞬間ですね。なんか用事があって，腹でも減って，メシでも作ってくれと，声をかけようか，そのまま寝かしておこうかと迷っている感じが見受けられます。……〈夫婦なんですね〉はい。

【図版 12M 解釈】

ここでは眠っている年老いた妻を起こそうとする夫の姿が語られる。夫は，眠る妻に対して何らかの治療的な働きかけをする訳でもなく，慈しみの行為を見せる訳でもない。ただ腹が減ったから，起こそうかどうかと迷っているというのである。このように肉親の情を感じさせない反応はむしろ少数派に属する。それは，B 氏の家族的な愛情体験の乏しさを表しているようである。

【図版 13MF 反応】(12"－1'05")

これは，自分の愛する女性を，何かの間違いで殺してしまったと。それで嘆き悲しむ男性。……裸ですよね，女の人はね。例えば，そのー，まあ，その，セックスの時に，何か痴話喧嘩がもとで，まあ，首を絞めて殺してしまったとか。つい，もののはずみで，殺すつもりはなかったんだけども，殺してしまって，嘆き悲しんでいる。……ろ，路頭に迷ってしま……どうしていいか分からなくて，もう，なんていうか，ものすごく狼狽している感じが見受けられます。

【図版 13MF 解釈】

痴話喧嘩がもとで男性が女性を殺害するというテーマが語られる。性交の最中の痴話喧嘩がもとで殺害に及んだとした点からは，B 氏に潜む衝動性が読み取れる。すなわち，この反応は，彼がときにコントロールを失い，衝動的に行動する恐れがあることを示唆している。

【図版 14 反応】(10"－1'15")

これは，まあ，思春期の子どもが，まあ家庭が厳しくて，自分の思い通りにならないことが多い中で，夜，窓を開けて，星を見ながら，まあ星は出ていないですけどね，夜，窓を開けて外を見ながら，いろんなことに思いを巡らしているという，そういう感じがあります。……〈思い通りにいかなくて……〉はい。〈例えばどんなようなことでしょう？〉どうしても自分の経験が出てきてしまうものですから（笑），満足な家庭で育ってないもんですから，まあ，人並みでありたいというような思いで……思い悩んで，窓開けて，夜空でも見て，ああ皆今頃何してるだろうな，テレビでも観てるだろうなとか，せめて一家団欒でメシ食ってるだろうかとか，そういうことを考えているんじゃないでしょうか。

【図版 14 解釈】

画中の人物（少年）は，夜に窓を開けて外の風景を見ながらいろいろな思いを巡らしているとされる。つまり，少年は外の風景を見ながらも，その風景に特別な関心をはらう訳もなく，もっぱら心の中でさまざまな思いを巡らせているのである。それは B 氏の性質がすぐれて内向的であることを示している。また，この少年の思いに注目するならば，B 氏があたたかい家庭に恵まれず，それゆえに家庭的な愛情を希求していることが，敢えて解釈するまでもなく伝わってくるのである。

【図版 15 反応】(7"－1'10")

これは，自分が今までしてきた罪に対して反省をしているというか，思いを……駆け巡って，頭の中で駆け巡っているというか，そういう夢ですね，これはね。〈夢？〉現実ではなくて，夢の中で。……現実では，とてもちょっと，墓場の中で男が両手の自由を奪われたまま立っているというのは考えにくいものですから，まあ，今まで死んでいった自分の仲間や友達が，そういう，言いたかったこと，苦しかったこと，辛かったことを言おうと，訴えようと，夢の中に出てきたような感じは見受けられますけどね。どうしても自分とフィードバックしてしまうものですから。……そんなような感じがします。

【図版 15 解釈】

自分の罪を反省するというテーマは非常にポピュラーなものである。しかし B 氏の場合は画中の人物の思考・

行動をまさに自分のことのようにリアルに捉えている点が特徴的である。B 氏には，自己の罪を認め，自己を責めるという自罰傾向がかなり強い人のように思われる（cf. 図版 11)。なお，ここで用いられる「フィードバック」という言葉は，文脈に照らすと適切ではない。おそらく「オーバーラップ」の誤りであろう。

【図版 17BM 反応】(8"－35")

これは，表情が，それでも豊かですから，力自慢の男が自分の力を自慢するために，高いビルの上からロープをつたって下へ降りる途中で，「どうだい」と余裕のあるところを見せている図，というような感じです。……そんな気がします。

【図版 17BM 解釈】

力自慢の男がその力を見せつけるというテーマである。B 氏には，このように自己の力を他者に見せつけようとするナルシシズムが存在するのであろう。

【図版 18BM 反応】(7"－38")

これは，ちょっとロマンチストな人間が，上からコートかなんか羽織らせてもらって気取っているところぐらいですね。……ちょっとロマンチストの男が自分の姿に酔っているというか，そんなような感じが見受けられます。……〈自分の姿に酔っている〉はい。……〈そんなところですか？〉はい。そんなところです。

【図版 18BM 解釈】

画中の人物はコートを羽織らせてもらうという奉仕を受け，気取っているとされる。ここには，先の 17BM と同じく，B 氏の自己愛的な傾向が反映されていると見てよかろう。なお，この反応にも，強くはないにしても，やや不適切な言葉の使用が認められる。「ロマンチスト」よりも，「ナルシシスト」の方が文脈に即していよう。

【図版 19 反応】(17"－1'30")

これは難しいですね。……雪国の，外国，まあ日本じゃないですね，これだけ雪があって，窓の形からしても外国で，雪国で，これは煙突ですよね。それで深い雪の中，または嵐の中で家の中に閉じ込められている子どもが 1 人いますよね（図版左側の円の内部を指す)。……こっち側（右側の円）には両親か誰かがいるんだろうけども，この絵では子どもだけしか見えませんね。……〈閉じ込められているというのは，どういうことなんですか？〉うーん……だから深い雪と嵐のために外に出るに出れなくて，家の中で……あのー……なんか，こう横に鞄みたいなのを下げているような感じもしますので……たとえば，学校へ行きたいけど行けないというような，そんな感じが受けられます。

【図版 19 解釈】

深い雪の中の家は，一見すると自然の脅威から子どもを守る砦のようである。しかしこの反応をじっくりと読んでみると，子どもは雪と嵐のために外へ「出るに出（ら）れ」ず，家の中に「閉じ込められている」と語られている。つまり，子どもは家の中に留まることを必ずしも良しとしないのである。一歩踏み込んで解釈するならば，これは B 氏が安全基地としての家庭イメージを持っていないことを表しているのではなかろうか。そう考えるならば，この反応は図版 2 や 12M から解釈された B 氏の家庭イメージの希薄さや，「家庭がない」あるいは「家庭への憧れ」といった一連の B 氏の発言（4，6BM，14）と同列に位置づけられるものと見なせるのである。

【図版 20 反応】(5"－1'27")

ものすごい暗い中に 1 人写っているけども，これはなんか黒いマスクをした犯罪者のようでもあり……ヒットマンじゃないでしょうか。……こういうスキー帽ってあるでしょ。マスクして，帽子かぶって，ちょっとしたハーフのコートを羽織って……。そんな感じです。……〈どうしてこの場にヒットマンがいるんでしょうね？〉誰かを待ち受けている。今までの実績を……データをアレして，この時間に，この，たとえば，これガス灯ですね，これね。このガス灯のところで待ち受けていれば奴らは通るということで，待ち受けているような，そんな感じがしたものですから。〈はい，分かりました〉ヒットマンは本当に緻密なデータに基づいてしか動きませんからね。

【図版20解釈】

B氏は暗い夜道にたたずむ人物の姿を認めるや否や，即座にヒットマンを連想したようである。このような反応を生じさせたのは，B氏の暗闇に対する恐怖感と徹底的な人間不信であるといえよう。

【図版12BG反応】(7"－1'57")

これは舟が丘に上がっているというのもおかしいですね。これ，うしろは小川でしょうか。〈それは自由に想像していただいて結構です〉……舟が……なんとも奇妙な絵ですね。……見様によっては棺桶にも見えますしね。……あの風葬っていうんですか？〈ふうそう？……ああ，風っていう字に葬るっている字？〉風で葬るという……そういう感じにも見受けられますね。……〈これが棺桶で？〉はい。中にいま亡くなった方が入っていて，自然の中で，まあ自然に帰すと……そういう感じがします。……どうも川にしては狭すぎる感じがしますので，舟と川とちょっと繋がらないし……あと，木の茂り方がね，どうしても自然，広大な自然を思わずにいられないような感じがしますので，やっぱり，そうなると，やっぱり，そういう，いろんな風俗や生活習慣の違いから，そういったことも考えられるのではないかと思って，そういうふうに言いました。

【図版12BG解釈】

最後にB氏はTATを「風葬」で締めくくる。たしかに図版12BGには人間が存在せず，寂しい場面のようにも見えるが，ここから棺桶や葬送など，死を連想させるものを読み取る人はほとんどいない。したがってこれはB氏に独特の反応といえる。このような反応を生じせしめたのは，B氏に常につきまとう死のイメージではなかろうか。つまり，B氏は，人が不在であることからもたらされる寂寥感を，死を象徴するものと見なしたのであろう。それが「棺桶」や「風葬」といったイメージへと繋がったと考えられるのである。

【TAT解釈のまとめ】

B氏の与えた結果について，まずは適応水準の点から検討していきたい。

全反応を通して，奇異な場面認知，独特な言語表現等，精神病的な逸脱は見当たらない。ところどころ不適切な言葉を用いてはいるが（例えば，「フィードバック」(15)，「ロマンチスト」(18BM)），少なくとも了解不能な反応は1つもなく，その意味ではB氏の現実吟味力はある程度は機能しているといえよう。しかしながら，社会的な適応の観点からは，以下の点が問題となる。

現在，B氏の不安耐性はきわめて低下しており，感情がかきたてられるような刺激に遭遇すると，途端に統制を失い，混乱をきたす傾向がある（8BM，9BM，20)。その一部はPTSDに特有のフラッシュバックの症状に関連するものと考えられる。このことに加え，B氏にはかなり衝動的な面が認められる。したがって些細なことがきっかけとなって，自分自身や他者を傷つける危険性が予測されるのである（11，13MF)。特に，彼は過去の自らの行動に対する自責の念をかなり強く持っているようである（15)。それゆえ，この自責感が自己破壊的な行動に結びつく危険性は無視できない。

次にB氏のパーソナリティ特徴について考える。B氏のプロトコルを通覧して目を引くのは，萎縮し，無力化した自己イメージである（1，6BM)。このような自己イメージを抱くようになったきっかけとして，彼自身もある程度自覚しているように，過去の過酷な体験が影響していることは否定できない。しかし，それだけではなく，幼少期からの生育歴の中にもその要因を見出すことができる。おそらく，B氏の親（あるいは親に代わる保護者）は彼に対して，愛情や教育の機会を十分に与えなかったのであろう（1)。むしろ必要以上に彼を叱責する傾向があったのではなかろうか（1，6BM)。このような必要以上の叱責は，子どもを育むというよりは，その自立性や自発性を摘み取る方向に作用することがある。つまり，彼は親から度重なる叱責を受けたことにより，去勢され，萎縮したと考えられるのである。彼が，一人前の男性としての同一性を十分に獲得していない（7BM）のは，このことが遠因となっているのかもしれない。

このような背景があるせいか，B氏は自らに家庭がなかったこと，言い換えるならば，親から十分な愛情を与えられなかったことをしきりに強調する（2，6BM，14)。家庭的な愛情の乏しさを表しているのは，何もB氏の実際の言葉ばかりではない。解釈のレベルからもそれは十分に読み取れるのである（2，12M，19)。いずれにしても，このように家庭環境が劣悪であったためか，家庭的な愛情を求める思いはかなり根強い（2，4，6BM，14)。

家庭的な愛情，突き詰めれば親からの愛情に対する飢餓感が，B 氏の対人関係の発達に影を落とした可能性は否めない。B 氏が自己愛的な様相を示し（17BM，18BM），他者との間の成熟した愛情関係や信頼関係を認めることができない（10，12M）のは，彼がいまだに自己愛の段階に留まり，対象愛の段階への移行を十分に果たしていないことを示しているようである。つまり，親の愛情への飢餓感に由来する固着である。図版 10 において，親に窮状を訴えて庇護される子どもの側に身をおいたのも，おそらくこのことと無関係ではないであろう。

まとめると，幼少期からの劣悪な家庭環境が B 氏の自己イメージを矮小化させ，無力化させた可能性がある。そのことに加え，過去のある出来事が「払拭できない」ほどの強い恐怖体験となった。この恐怖は時にフラッシュバックし，B 氏を苦しめるようである。また過酷な体験が原因となり，ときに B 氏を自己破壊的な行動へと駆り立てる危険性すら認められる。このように見ていくと，検査当時の B 氏はかなり危機的な状況にあったことが理解できる。

Ⅲ－3　ロールシャッハ・テストの結果と解釈

事例 1 と同様に，B 氏のロールシャッハ・テスト全記録を Table 3 に，スコアの要約を Table 4 に示した。実施，分析の手続きは片口法による。

Table 3　B 氏のロールシャッハ記録

	自　由　反　応	質　　問	ス コ ア
Ⅰ 1	(2"∧) これは仮面のように見えますね。	〈仮面はどこに見えましたか？〉これ，全部です。これが耳で，これが目で，口……髪……〈仮面らしさ？〉目とか，口とか，髪とか，耳とか……。	W, S F± (Hd)
2	(∧) 蝶々の模様のようにも見えます。	〈蝶々の模様？〉こっちが頭で，これが羽……ちょっと，くたびれた羽のように見える。〈蝶々の模様？〉それは斑紋のことです。南方の蝶には，よくこういった斑紋があるんです。敵を威嚇するためのものですね……〈くたびれた羽？〉この羽の輪郭線が，はっきりしていないんで……ボロボロになったような形をしているんで，クタクタの感じがしました。	W, S F± A P
3	(∧) それと，悪魔の顔みたいにも見えます。	〈悪魔の顔？〉ツノ，耳，つり上がった目，裂けた口……〈悪魔らしさ？〉裂けた口。口から血が出ているように見える。舌も出している。ここの色の濃くなっているところは舌。色の薄くなっているところは血。〈血？〉悪魔がどっかに食らいついたんでしょう。それで口から血が流れているんです。	W, S F±, M, m (Hd), Bl
4	(∧) 頭を車輪か何かに踏みつぶされた猫か犬の顔みたいに見える……そんなところです。(1' 35")	〈どこに見えましたか？〉ここです。この線が，まるで車輪に踏みつぶされたように見えた。……これが耳で，あとは，さっきの悪魔と同じような感じ。……これは，目なんだけど，車輪で踏みつぶされるとこんな風に目がつり上がって見える。私は，こんな踏みつぶされた動物の顔をよく見るんですよ。道路で車に轢かれたのがよくいるでしょ。私は，こんな醜いものばかりをよく覚えているんですよ。	W, S Fm∓ (Ad)
Ⅱ 1	(5"∧) これは，ビルか何かから飛び降りた後の，人間の血糊のあとみたいに見えます。……ともすれば，心中のようにも見えます。手と足を縛りつけたような……それ以外に思い浮かびません。(55")	これが，手で，この辺は胴体……これが膝……足がないんで足首がもげたのかもしれません。……頭の部分は，赤くなっていて，頭の原形をとどめていないんで，砕けて血糊だけになってしまったよう……以前 C という歌手が，ビルから飛び	W F±, CF, m H, Bl (P)

		降り自殺をやったことがあるでしょ。そのときの写真を私は見たことがあるんですけど，ちょうど，こんな感じなんですね。……あと，手足がどうしても縛ってあるような気がして，どうしようもないんで手と足を縛って飛び降りたような心中に見えました。……〈血糊？〉この色のにじみ具合はドス黒い血を連想しました。……動脈だったか，静脈だったか，どっちか忘れたけど，血管を切ると，このようなドス黒い血が噴き出すんですね。……私，そういう映像を見たことがありますから。	
Ⅲ 1	(3"∧) これは，どっか発展途上国のお祭りのようで……松明か何かを焚いて，太鼓を叩いている土人……インデイオみたいな発展途上国の人……その他には見えませんね。(42")	これが頭で，こっちが体です。多分，女性ですね。胸があるから。腰には何か巻いている。そして，太鼓を叩いている。〈土人とかインデイオに見えたのは？〉着るものからですね。裸体みたいに見えるし……あと，太鼓を叩いて，松明みたいなのを焚いているのは，発展途上国の土人のお祭りみたい。〈松明？〉太鼓を叩いている後ろに，赤い色があるというのは，火以外に考えられなかったからですね。	W M＋ H, P CF Obj, m Fire
Ⅳ 1	(3"∧) これは何か巨大な悪魔というか……怪獣のようにも見えます。尻尾とか足とか…それ以外には見えませんね。怪獣といった感じですね。まあ，悪魔みたいな感じもしますけど……(45")	これが頭で足と尻尾。こういうの俯瞰図って言うんでしたっけ？鳥瞰図っていうのは，確か上から見下ろした図ですよね。……まあ，とにかく下から見上げた図です。〈悪魔，怪獣らしさ？〉手がないところですね。それと尻尾があるし。それと，頭がどうしても人間らしくないところですね。	W FK± (A)
Ⅴ 1	これはコウモリとか…。	〈コウモリ？〉これが頭で，耳，羽，足……耳の大きいコウモリっているじゃないですか。オガサワラコウモリって言うんですね。……本当はコウモリの羽ってライト兄弟の翼のように張りがあるから，ちょっと違うんですけどね。私って，写実主義ですから。	W F± A P
2	それと蝶々…。	〈蝶々？〉こっちが頭で，こっちが羽。蝶々がサナギから孵って間もない頃は，ちょうどこんな感じなんですよ。羽がまだ伸びきってなくて。〈？〉羽の輪郭がピンとしていなくて，シワシワしてるから。	W F± A P
3	あと，鳥ですね。ツノがあるというのがちょっと気になりますね。	〈鳥？〉さっきのコウモリとほぼ同じですね。頭と羽と足と……ツノみたいなのがちょっと気になりますけどね。鳥には，こんなのないですからね。	W F± A
4	やっぱり悪魔ですか，行きつくところは (笑)。(40")	〈悪魔？〉頭，足……羽みたいなのを広げているような感じ。コウモリからの連想でしょうかね。〈特徴？〉頭とか，その上のツノの様子からですね。	W F±, FM (A)
Ⅵ 1	(5"∧) これは，虎か何かの敷皮があるでしょ。あれに見えますね。…こういうの見たことあるんで…そんなことです。(41")	ここが頭で，ヒゲ，手，足。尻尾はない。〈虎？〉頭の形が虎以外の何者でもないです。でも，尻尾のないところを見ると，白熊にも見える。むかし，さる大きな会社社長のお宅で，こんなのを見たんです。白熊の毛皮を。本当は禁制品なんですが……。	W F± Aobj P
Ⅶ 1	(3"∧) これは，小さい子供……女の子が，鏡に向かって，ひょうきんなポーズを取って遊	これが頭。頭をポニーテールにして，生き生きとした感じがするでしょ。それに手をピッとこ	W M±, FK H, Cg P

	んでいるところ。１人で……それを横から見た感じ。(図版を置く)(42")	んなふうに上げて，ひょうきんなポーズを取っている。こっち側（左側）が本物で，こっち側(右側）が鏡に映った方。下は丈の長いスカート。ここが鏡との接点。	
Ⅷ 1	(20"∧) これは……うーん……なんか昔の……古代儀式というか…熊のぬいぐるみを被った人間が祭壇を……木とか，火を焚いて，祭っているというか……そんな感じ。……アイヌのイヨマンテの熊の祭りというか……現代的な感じがしませんね。……アイヌとかメソポタニアとか……(1'28")	これね，人間にしては，ちょっと形が変でしょ。だから熊のぬいぐるみをかぶっているんですね。……これ，下に火があって，ここに祭壇。ここには木がある。この熊のかぶりものをした人間は，手に何か松明みたいなのを持って，片手を木に添えて，片手を松明にかざしている。〈火？〉色の具合からです。で，この熊のぬいぐるみが赤っぽく見えるのは，火に照らされてるように感じたからですね。〈木？〉一本，芯が通ってる。あと，色の感じも……葉の形からすると，針葉樹のようですね。〈アイヌのイヨマンテ……メソポタニア？〉これは，どうも現代的な感じではなく，昔の古代儀式のような感じがしたからです。アイヌのイヨマンテのお祭りって，なんか，熊のぬいぐるみみたいなのをかぶってやるような気がしたので……私はそのように記憶してます。	W M∓ H, FC Obj CF Fire Pl
Ⅸ 1	(14"∧) これは……なんか真ん中にあるのは，骸骨みたいに見えますね。……どっちかと言うと，陰湿なものを感じる絵です。……うーん……そんなところですね。(1'46")	〈骸骨？〉ここです。これが目で，これが歯……。〈骸骨のように見えたのは？〉……まず，赤い部分が目に飛び込んできて，それをよく見てたら，人間の肩みたいに見えてきたんですね。次に，肩があるんだったら首があるはずなのに，首ではなくて，なんか歯のようなものが見えたので，骸骨が上にのっかってるように感じたんですね。…なんか詰襟の服をきているようだし……軍服みたいな……まるで，ナチスドイツの亡霊のような…まわりの配色もオドロオドロしい。〈？〉骸骨の上部は輪郭もボヤけているので，それがオドロオドロしさを演出しているように見えました。	W F±, Csym (Hd)
Ⅹ 1	(15") これは……なんか相討ちというか……何か同じようなものを持って，羽根飾りみたいなもののついた盾とか，短いナイフのようなものを持って，戦いを始めたところですね。……古代的な感じがします。昔の文明か……あるいは，発展途上国の戦い。(1'27")	〈相討ち……？〉これが人間，こっちが頭で，胴，足…片手には小刀を持っている。で，これは，羽根飾りのついた盾。……もしくは，その上の緑のところは，斧のようにも見える。人間と人間がぶつかり合って，まさに戦いを始めたところですね。……周りの，この辺にあるものは火花ですね。火花を散らせていると言う印象ですね。〈火花？〉やっぱりこれを人間として中心に据えると，周りのものは火花としてでしか説明がつかなくなります。……よく漫画にあるじゃないですか。火花が散っていると言うのは，こういう感じがします。だから，ある意味で，この火花は真ん中の人間の気合を表していると言うか，そんな感じがします。	W M± H, Obj, Abst

Table 4　B氏のロールシャッハ要約表

R (total response)		16		W：D		16：0		M：FM	4.5：0.5
Rej	Rej	0	0	W %		100 %		F % / ΣF %	62 / 100
	Fail		0						
TT (total time)		10' 41"		Dd %		0 %		F＋% / ΣF＋%	90 / 81
RT (Av.)		1' 04"		S %		0 %		R＋%	81 %
RT_1 (Av.)		0' 07"		W：M		16：4.5		H %	50 %
RT_1 (Av.N.C)		0' 03"		E.B	M：ΣC	4.5：2.5		A %	44 %
RT_1 (Av.C.C)		0' 11"			FM＋m：Fc＋c＋C'	3：0		At %	0 %
Most Disliked Card & Time		Ⅷ			Ⅷ＋Ⅸ＋Ⅹ/R	19 %		P個 (%)	6.5 (41 %)
		0' 20"							
Most Disliked Card		Ⅱ		FC：CF＋C		0.5：2		Content Range	3
修正BRS		−10		FC：CF＋C：Fc＋c＋C'		2.5：0		Determinant Range	4

【形式分析】

B氏の与えた反応をスコアの面から検討すると，それは奇しくも先のA氏と非常によく似た結果を示すものであった。まず形態水準に目を向けると，いずれも高い数値を示しており，B氏の現実吟味力は適切に機能していることが理解できる。さらに，平凡反応が合計で6.5個も出現したことは大いに注目すべきである。これは彼が常識的に物事を判断できる力を有していることを意味するものである。これらは，いずれも精神病を否定する材料となる。

さらに体験型における3つの指標はいずれも内向型であることを示している。それは，B氏が現実に目を向けるというよりも，むしろ空想や想像といった内的な活動に入り込みやすいことを意味している。

すべての反応が全体反応（W%＝100%）であるのは，物事の捉え方があまりにも一面的に過ぎることを示している。あるいはB氏はすべての図版を全体で見なくてはならないと思い込んでいたのかもしれない。しかし一般的なテスト場面においては，当初はそういった思い込みがあったとしても，途中でそれを修正し，部分反応を与え始める人の方が圧倒的に多い。それに鑑みると，最初から最後まで全体反応で通したB氏は，相当に硬いパーソナリティであると言わざるを得ない。

また，このW%＝100は，別の角度からの解釈も可能である。全体反応は図版全体をまとめようとする知的野心を反映する。全体をまとめにくいとされる，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ図版において全体反応に固執する場合は，特にその傾向が強くなる。そのような場合には，強迫的な完全癖を推測してもよい。B氏の場合はすべてがWであることに加え，形態水準がかなり高い（R＋%）ため，このような推測がより確かなものとなる。

【継起分析】

Ⅰ図版では，B氏は4つの反応を与えている。第1反応は図版全体を顔に見立てたものである。反応の頻度表(高瀬，2006，pp. 53-55）に照らすと，この種の顔反応は健康な成人にも比較的よく出現するため，特別に問題があるというわけではない。しかし「仮面」という内容にはB氏の特徴が表れている。仮面は素顔を隠すとともに，外からの攻撃を遮断し自己を守るという意味も暗に含んでいる。それゆえに，最初にこの反応を与えたB氏は，未知なる場面では警戒心が強く，自らを守るべく「仮面」を被り，慎重な態度で臨む人であるのかもしれない。

第2反応の「蝶々の模様」は，質疑段階で「敵を威嚇するためのもの」と説明される。このような意味を持つ「斑紋」は，外敵から身を守るという点において「仮面」と同列に位置づけられる。すなわち，B氏は，外界の脅威を認知しやすく，その脅威から自らを守るために，「仮面」や威嚇用の「斑紋」を必要としているのであろう。ところで，B氏はこの蝶々をわざわざ「くたびれた羽……クタクタの感じ」と形容する。これもまた，彼の自己イメージを反映している。仮面で覆われる自己は，このように疲労し，弱々しいものなのであろう。

第3反応の「悪魔の顔」では，「食らいつく」という言葉でやや過剰と思われるほどに攻撃性を表現している。それは，取りも直さずB氏に潜在する攻撃性を表している。その観点から次の第4反応を検討してみると，「車輪に踏みつぶされた」という言葉に示された著しい被害感は，B氏自身の攻撃性の投影であると見なすことができる。

つまり，彼は自らの攻撃性をうまく統御できないがゆえに，それは外在化され，外から不意に訪れる暴力（＝m）として認知されたのであろう。

Ⅱ図版には「人間の血糊のあと」という凄惨な反応を与えている。わずか 5 秒で反応していることから推測するに，B 氏はよく吟味したうえでこの答えを与えたとは言いがたい。むしろ彼は血を連想させる赤い色に感情を強く刺激され，コントロールを失ったのである。また，質疑段階でのやり取りに注目するならば，「C（歌手）が自殺した時の写真はちょうどこんな感じ」とか「動脈か静脈を切るとドス黒い血が噴出する」など，個人的な経験を述べたものが目立つ。彼は，赤い色に触発されて，恐怖に満ちた記憶をありありと想起したようである。ここから，B 氏は，感情を強く刺激されるような場面に遭遇すると，自らを律して適切な行動をとるのが困難になることが推測される。

Ⅲ図版では一転して質の良い反応が与えられる。赤色を松明，下部の D 領域を太鼓とし，全体を「発展途上国のお祭り」とまとめたのは無理がなく，よく構成されている。また，発達的にみてより高度な水準にあるとされる人間運動（M）反応を与えた点も肯定的に評価できる。先のⅡ図版で統制を崩したのにも拘わらず，ここで持ち直したのは B 氏の自我機能がある程度は柔軟であることを示していよう。ただし，彼がここで「女性が太鼓を叩いている」と述べるにとどまり，女性が 2 人いることにいっさい触れなかったのは注意しなければならない。通例，Ⅲ図版では人間が 2 人いることを指摘し，なおかつ人間像間の何らかの相互作用について言及する人の方が圧倒的に多いからである。このことを踏まえると，B 氏には対人関係への関心がやや乏しいように思われる。

Ⅳ図版の「巨大な悪魔か怪獣」という反応は，出現頻度が高く，形態質も良いので，さほど問題視する必要はない。ただし，質疑段階での一連の発言は目を引く。うろ覚えでありながらも，「俯瞰図」や「鳥瞰図」などのあまり一般的ではない言葉をわざわざ持ち出しているところをみると，B 氏はまるで自分には知性があるかのようにふるまっているようである。この行動は，あるいは知的コンプレックスを補償する役割を果たしているのかもしれない。そう考えると，ここで見られたペダントリーは，Ⅰ図の「仮面」や「蝶々の斑紋」と共通の意味を持つ。B 氏は知性という「仮面」で自らの弱さを覆い隠し，虚勢をはっているのであろう。

Ⅴ図版は，特に第 1 反応に注目したい。「コウモリ」は平凡反応ではあるが，「耳が大きいオガサワラコウモリ」という説明に彼一流のペダントリーが表れているからである。なお，ここで B 氏が耳や羽のような身体部位をいちいち取り上げて細かく説明しているのは，強迫性の表れと解される。

Ⅵ図版の「虎の敷皮」(質疑段階で「白熊」に変化）は，平凡反応であるので，ここに大きな問題があるというわけではない。しかし，虎にしても白熊にしても，「こういうのを見たことがある」と個人的な経験を根拠に答えの正当性を主張している点は注目してよい。個人的に「見たことがある」のならば，検査者は知覚の根拠について踏み込んで質問することができない。それゆえ，このように個人的な経験を語るのは検査者からの質問を遮るための防衛手段にもなりうるのである。これも B 氏の警戒心の強さ，防衛的な面を表しているといえよう。少々うがった見方をすれば，「さる大きな会社社長のお宅で見た」という説明は，あたかも検査者を威圧するかのような雰囲気がある。これはⅠ図版の敵を威嚇する「斑紋」につながる。

Ⅶ図版もまた平凡反応である。「生き生きとした」人間像を見たのは良いが，この反応もⅢ図版と同じく，2 人の人間像間の交流は見ていない。やはり B 氏は，対人関係にはあまり関心を持てないようである。むしろ彼は，この反応に示されるように，鏡に映った自分の姿の方に関心があるのかもしれない。ここから自己愛的な傾向を推測することも可能である。

Ⅷ，ⅨおよびⅩ図版は，全体をまとめるのが難しい。しかし，B 氏は，これらに対しても全体反応に固執している。そこには B 氏の強迫的な傾向が反映されている。ところで，Ⅷ図の「アイヌのイヨマンテ」は，全体をまとめるのにこだわるあまり，無理が生じて反応の質が低下している。彼は，図版を各々の領域に分けて見るような柔軟な対処ができないのである。それは，形式分析でも指摘した知覚の硬さを示している。なお，B 氏はここでもうろ覚えの「イヨマンテ」や「メソポタミア」について，あらん限りの知識を誇示している。これも一連のペダンチックな行動に位置づけられよう。

Ⅸ図版では「亡霊」を見る。この反応の基本的な知覚は適切であるため，その点に関しては問題はない。しかし，B 氏は検査後に，この図版を自己イメージカードとして選び，その理由を「自分を破滅の方向へ導いているから」と述べている。たびたび出現する「悪魔」(Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ図版）や「亡霊」は，たしかに人々に厄災をもたらすもの

である。そう考えると，これらのイメージはB氏のいうように，彼の内面にたえず存在しながらも彼自身が適切に扱えない，自己破壊的な衝動を反映しているのであろう。

さて，X図版になって，初めて2人の人間像間の交流に言及した運動反応が表れる。しかし，それは「相討ち」という攻撃的なニュアンスを帯びている。これまでの反応を振り返ると，B氏にとって他者とは，信頼したり依存したりするような対象ではないことが見えてくる。むしろ，他者との関係は攻撃したり，されたりという殺伐としたものなのであろう。

【ロールシャッハ・テスト解釈の要約】

B氏の現実吟味力はよく保たれており，常識的に物事を判断する力が備わっている。少なくとも重篤な精神疾患に罹患している可能性は低い。しかし，認知の様式は硬く物事を多面的に捉えることが困難である。また強迫的な傾向も持つ。

B氏は，強い情緒刺激（例えば血を連想させるもの）に出会うと，苦痛や恐怖に満ちた記憶がありありと蘇るようであり，その際の自己統制は困難になる。また，彼には強い攻撃性が認められるが，普段はそれがあまり意識化されていない。ときにその攻撃性が外部に投影され，被害的になることもある。

脆弱な自己イメージを抱き，それを補償する意味で虚勢をはる傾向がある。特に知的コンプレックスが強く，それを補償すべくペダンチックにふるまうことが多い。このような背景を持つせいか，他者に対しては過度に警戒心が強く，良好な対人関係を保つことは困難である。

Ⅲ－4　事例2のまとめ

事例1と同様に，両検査に共通して認められたパーソナリティ特徴，それぞれの検査に独立に認められた特徴を列記する。

【TATとロールシャッハ・テストに共通した面】

⑴　現実吟味力がある程度は機能している。
⑵　不安耐性が低下しており，かつての自分自身の体験を彷彿とさせる場面に遭遇すると，統制を失い，混乱をきたしやすい。
⑶　衝動的な面が認められる。些細なことがきっかけとなって，自分自身や他者を傷つける危険性がある。
⑷　萎縮した自己イメージを抱いている。
⑸　対人関係への関心が希薄であり，他者との間にしっかりとした愛情関係・信頼関係を築きにくい。

【TATのみから引き出された情報】

⑴　親から愛情や教育の機会を十分に与えられなかった可能性がある。また，親から必要以上に叱責された可能性も考えられる。
⑵　一人前の男性としての同一性を十分に獲得しておらず，いまだに親（あるいは親に代わる対象）から庇護される側に自らの身を置きがちである。
⑶　自己愛的な段階に留まり，対象愛の段階への移行が十分にはたされていない。
⑷　自責の念が強い。

【ロールシャッハ・テストのみから引き出された情報】

⑴　現実に目を向けるというよりも，むしろ空想や想像といった内的な活動に入り込みやすい。つまり内向的である（これについてはTATの図版14にも，弱いながらもその傾向が表れている）。
⑵　物事の捉え方があまりにも一面的に過ぎる。つまり認知のあり方が硬い。
⑶　強迫的な完全癖がある。
⑷　警戒心が強く，自己防衛的になりがちである。ときに虚勢をはり，他を威圧することによって自己を守る傾向がある。
⑸　強い攻撃性が潜在するが，それはときに外部に投影され，被害的になる。

事例2においても，両検査の解釈結果の一部が一致した。ロールシャッハ・テストに焦点を当てると，その内容

分析から引き出された特徴の多くが TAT の解釈結果と一致することが確認された。これは，注目すべき現象である。

次に TAT が単独で明らかにしたパーソナリティ特徴に注目すると，そこには親子関係のあり方や，それに基づいて形成されたと思われる自己イメージ，あるいは人間関係全般の質が鮮やかに映し出されていることが認められた。人間関係の側面に光が当てられたという点では事例 1 と同じである。

一方，ロールシャッハ・テストには「内向性」「認知の硬さ」「強迫性」といった特性が表れた。事例 1 と同じく，これらの特性も，外界の認知の様式，あるいは外界への対処方略というキーワードで括ることができるであろう。

Ⅳ　総合考察

2 つの事例を振り返り，まずは TAT とロールシャッハ・テストという 2 つの投映法が映し出すパーソナリティの諸側面を，その共通性，相違性の観点から検討する。ついで，鈴木（2002）の見解を踏まえながら，両検査が照らし出す意識の層に関する仮説について考えたい。

Ⅳ－1　2 つの検査の共通点，およびそこから見た各検査の特徴

2 つの事例のいずれにおいても，両検査の解釈結果には共通する点が複数認められた。しかも，その共通点は被検者のパーソナリティを理解するうえで重要な手がかりとなるものであった。このように両検査に共通点が見られたことは鈴木（2002）の結果とまったく同じである。それは，両検査によって明らかにされるパーソナリティ特徴はまったく異質なものではなく，その中には重なり合う部分が少なくないことを示している。

この共通部分を仔細に検討してみると，両検査の性質を知るうえで，ささやかながらも重要な示唆が得られる。ロールシャッハ・テスト側からみると，TAT と共通した解釈は，たとえば「女性的な行動傾向」「萎縮した自己イメージ」など，その多くが反応内容の分析から得られたものである。一方，スコアの頻度・比率に基づいた，いわゆる形式分析から引き出されたものは，TAT とはあまり一致していない。

この結果から 2 つのことが言える。第一に，鈴木（2002）も指摘するように，ロールシャッハ・テストにおける内容分析は TAT と共通する面が多いということ，第二にロールシャッハ・テストの独自性は形式分析にあるということである。いずれの点も，ロールシャッハ・テストの実践者にはよき戒めとなる。かつて，この検査の分析・解釈方略の中に精神分析理論が持ち込まれ，その内容分析が盛んに研究されたことがあった（例えば De Vos, 1952；Holt, 1977)。今でもこういった動向が決してすたれたわけではない。しかし，内容分析の偏重はロールシャッハ・テストが TAT 的手法に染まっていることを意味するのであって，もともとこの検査が目指したものではないことをわれわれは自覚せねばならない。反応の領域や決定因子の数および比率などの量的分析こそがロールシャッハ・テストの心髄であり，その独自性を際立たせている点である。これを踏まえると，検査の分析・解釈にあたっては形式分析に相当に力を注がねばならないことがよく理解できよう。この形式分析の持つ意味については，次節の各検査の独自性の中で詳しく述べることにする。

さて，上の議論から必然的に導かれるのは，ロールシャッハ・テストに比べると TAT はすぐれて内容分析的な志向性をもっているということである。TAT 反応とは，与えられた刺激素材から構成された物語である。物語は全体を読んでその意味をつかまねばならない。それゆえに，ロールシャッハ・テストの形式分析の中で行なわれるように，反応を要素ごとに分解するのは困難がともなう。しかし，一つひとつの物語をまるごと対象にして，その内容を丁寧に分析するからこそ，そこに表現された事象を包括的に捉えることができる。つまり，TAT とは主に与えられた内容から被検者を理解する道具なのである。そこに TAT の持ち味があるといえよう。

Ⅳ－2　それぞれの検査の独自性

本節では各検査がそれぞれ単独に映し出したパーソナリティ特徴について検討する。言うまでもなく，それは前節でも少しふれた各検査の独自性，持ち味を追究するための重要なプロセスである。まずは，TAT から見ていく。

事例 1 では，TAT は，被検者の異性関係，家族関係のあり方を浮き彫りにするとともに，その関係の中で彼が体験しがちな怨恨，劣等感といった感情を鮮明に映し出した。また事例 2 は，親（あるいはそれに代わる保護者）

との関係のあり方，そしてその中で培われた矮小化した自己イメージを垣間見せてくれた。これらのことが雄弁に物語るように，TATは被検者の体験するさまざまな人間関係の様相を，鮮やかに，そして細やかに映し出す道具といえる。もちろん，ここでいう人間関係とは現在のことだけに限ったことではない。TATには，事例2のように，被検者が過去に体験した原初的な親子関係と，それをもとに形成された自己イメージや対人関係の特徴がよく表れるものである。このような性質を持つがゆえに，TATは，被検者の心理的な発達水準に関する有力な手がかりを提供するのみならず，場合によっては問題形成のプロセスをあたかも1つの物語でもあるかのように鮮明に描き出すことさえある。

そもそもTATの刺激および課題の特性，そして分析・解釈方略に立ち戻るならば，このことはより明確になる。TATはごく一部の図版（12BG，16，19）を除いてすべてに人間が描かれており，被検者はそこに描かれた人間，あるいは人間どうしの関係を意味づけることが要請される。そして検査者は主として与えられた内容を分析していくわけであるから，そこから被検者の抱く自己イメージや他者イメージ，あるいは人間関係の特徴が引き出されていくのは当然のことである。しかし，後に詳述するように，そこに示された人間関係の特徴には反応を与えた当人もはっきりと意識しえないようなものが多々含まれている。それこそがTATの真骨頂であり，心理検査たらしめている点といえよう。

それに対して，ロールシャッハ・テストが単独で引き出したパーソナリティ特性は，主に形式分析によって明らかにされた「内向性」「認知の硬さ」「強迫性」などである。一目してわかるとおり，TATが単独で明らかにしたものとはかなり趣を異にする。その意味するところについて，やはり検査の課題そのものに立ち返って考えてみたい。周知のとおり，ロールシャッハ・テストの特に形式分析の目的は，曖昧な図形を被検者がどのように解釈し，意味を与えるかに基づいて，被検者固有の体験のあり方を知ることにある。すなわち，図形認知の仕方を介して，被検者が外界とどのように向き合い，ふるまうかを推測するのである。この観点から，先の「内向性」云々という言葉を再度検証してみると，それらは被検者が外界に関わる際の基本姿勢とでもよぶべきものを言い表していることが改めて理解できる。

これを踏まえ，あえて大胆に言うならば，ロールシャッハ・テストが特異的に光を当てるパーソナリティの領域は，外界に関わる際に被検者に優勢に表れる認知および行動の傾向ということになる。そして，その傾向とは，まさに被検者の中に深く刷り込まれ，定着したものといえよう。したがって，それをパーソナリティの土台や骨格と表現するのもあながち間違いとは言えない。しかし，ここで気をつけねばならないのは，土台や骨格とされた部分が必ずしも無意識を意味するものではないということである。その証拠に，実際の臨床場面において，「内向性」「認知の硬さ」「強迫性」などといった概念を，もう少し一般的な言葉に置き換えて被検者に伝えてみると，彼／彼女らはそれをあっさりと認めることも多いのである。

ところで，ロールシャッハ・テストにも，TATと同じく，人間関係の様相を引き出す材料がある。その主たるものが人間運動反応である（Mayman, 1977；Blatt, S. & Lerner, 1983；Urist, 1977)。本研究の事例1のように，人間運動反応がTATに負けず劣らず，被検者の対人関係のありようについて有益な情報をもたらすことはある。しかし，1つのプロトコルの中に出現する人間運動反応の数は限られているし，多くの人はA氏のようにロールシャッハ・テストの人間像に対して過剰な意味づけを行なうことはあまりない。それゆえ，事例1は，人間運動反応から豊富な情報を引き出すことのできた，かなりまれな幸運なケースであるといえよう。敢えて言うまでもないが，人間関係について情報を得たいのであるならば，それを専門に査定するTATに役割を譲らねばならない。

Ⅳ－3　両検査が映し出す意識の層

ここでは両検査が映し出す意識の層について考えてみる。筆者は，ロールシャッハ・テストが無意識層を中心とする心の深い部分に光を当てるのに対して，TATはそれよりも浅い部分を照らしだすとしたシュナイドマンの仮説に疑問を呈した。それは，筆者自身による両検査の解釈と，被検者へのフィードバックという個人的な体験からもたらされた疑問である。しかし，これは決して筆者の個人的な体験に限定されたことではない。その証拠に鈴木(2002）もまったく同様の見解を示しているのである。このことは，取りも直さずシュナイドマンの仮説を見直す必要があることを意味している。そこで，筆者自身の視点から，この仮説について批判的考察を試みることにする。

各事例の解釈結果を振り返ってみると，ロールシャッハ・テストの引き出した結果を「深い」，TATを「浅い」

などと断ずるのが早計であることがはっきりと見えてくる。この点について両検査とコンプレックスとの関係を例にとって説明を試みよう。コンプレックスはパーソナリティの奥深い部分に根ざし，意識的にコントロールしえず，知らず知らずのうちに人の行動に影響を与える原因となりうることを思えば，「深い」ものである。そこで事例 1 に注目すると，ロールシャッハ・テストのⅥ図版への反応様式から，男性性について何らかのコンプレックスがあることがかろうじて推測された。しかし TAT には，被検者が自らの男性性に劣等感を抱いていることのみならず，性そのものに対して回避的な行動をとりがちであることまでもが比較的わかりやすい形で示された。また，事例 2 では，ロールシャッハ・テストから萎縮した自己イメージを推し量ることができたが，それが何に由来するかまでは明らかにできなかった。ところが TAT は，それが原初的な親子関係によって形成された可能性があることまでをも示唆した。ここにあげたのは決して瑣末なことではなく，いずれも被検者のパーソナリティや彼らの抱える問題を理解するうえで重要な情報である。以上からも明らかなように，TAT はロールシャッハ・テストよりも「浅い」部分だけに焦点を当てた道具では断じてない。TAT から引き出されたパーソナリティ特徴の中には，被検者の中に深く根ざし，明確には意識化されずに，その行動に影響を及ぼしうるようなものが多々含まれているのである。

こうしてみると，両検査のうちどちらが深く，どちらが浅いかといった議論があまり意味のないものに思えてくる。それゆえにここで見方を少し修正する必要があろう。これまでわれわれは，検査結果の中に心の「深い」層が表れたり，あるいは「浅い」層が表れたりといった現象の原因を検査そのものに一方的に帰してきた。しかし，その深浅を分かつのは，実は検査そのものではなく，検査課題と被検者側の要因の相互作用によるのではないか。かつて筆者は，TAT には比較的無難に反応を与えた人がロールシャッハ・テストで逸脱する事例や，逆にロールシャッハ・テストは何とか無難にこなした人が TAT において問題を表面化させる事例があることに注目し，ここから両検査の関係性について論じたことがある（高瀬，2008）。たいへん興味深いことに，被検者の中には，曖昧な図形に対して自由に連想を働かせる課題を得意とする人もいれば，与えられた刺激素材から物語を構成するという，制約の多い課題の方が得意な人もいる。むろん，両方とも難なくこなす人もいれば，不得手とする人もいる。これと同じように，曖昧な図形から連想されるものを特に制限なく語ることによって，表面に出にくかった内的な問題や特徴が噴出するケースもあれば，人物，年齢，性別等がある程度特定された絵柄に接して自らのコンプレックスが触発され，問題が露呈するケースもある。こういった観点から 2 つの事例を眺めると，事例 1 は，反応の自由度の高いロールシャッハ・テストの方に，極端な内向性，視野の狭さ，攻撃性など，その問題の根幹が表れたように思われる。これに比べると，事例 2 は，どちらかと言えば TAT の絵柄に刺激され，幼少期から比較的最近に至るまでの外傷的な出来事がより鮮明に引き出されたようである。被検者のどのようなパーソナリティ要因がこういった違いを生み出すのかについては，筆者は答えを見つけたわけではない。しかし，被検者側の要因を考慮するならば，少なくとも 2 つの検査のうちどちらが深く，どちらが浅いかといった単純な議論に決着をつけるための糸口にはなるであろう。

Ⅳ－4 「深い－浅い」という仮説の背景

前節で述べたように，2 つの検査の間に「深い」「浅い」の違いがあるとする議論は，筆者にはあまり有益なものには思えない。しかし，こういった考えがなかば定説化するまで浸透したのには，何か強力な理由があるからなのであろう。これについて鈴木（2002）は，たいへん意義深い考察を行なっている。最後にそれを紹介し，また筆者自身の考察も加えてこの論を終えたい。まずは，鈴木の考察を以下に紹介する。

たとえばロールシャッハ・テストの赤色刺激に対して，火を見るか赤いバラの花を見るかで情動の統制の面での意味づけは異なる。この検査について何も知らない人はこのことを予想し得ない。したがって，解釈結果を知らされた被検者は，どうしてそこまでわかるのかと驚きを禁じ得ない（このことが，あたかも心の深層を掘り当てられたかのような印象を生じさせる）。それに対して，TAT の課題はもう少し現実生活とのつながりを感じさせやすい。反応とそこから引き出される意味との隔たりも，ロールシャッハ・テストほどではない（このように隔たりが小さいゆえに，反応から引き出された意味があたかも浅いものであるかのような印象をもたらす）。これが鈴木の説明の要約である（鈴木，2002，pp. 199-201，括弧内は筆者による）。

この考察は簡にして要を得ている。したがってここに余計な説明を付け加える必要はいっさいない。しかし，筆者はあえて別の視点から考えてみることにする。先述のとおり，ロールシャッハ・テストの特に形式分析によって

引き出されるパーソナリティの側面は，外界に関わる際の被検者の基本姿勢と呼ぶべきものである。そして，この基本姿勢とは，被検者の中に深く刷り込まれ定着したものである。それゆえに，いかにもそれが無意識層の何かを言い表しているような印象をもたらしたのであろう。一方，TATは，被検者のさまざまなパーソナリティ特徴の中でも特に人間関係のあり方に焦点を当てた心理検査である。そのために，ロールシャッハ・テストが引き出す「基本姿勢」よりも，皮相なものを扱っているかのように見なされたのではなかろうか。これが上のような仮説が流布した一つの理由と考えられるのである。しかし，いずれにしても，それらが誤謬であるのは，これまでの議論から明らかである。

Ⅳ－5　まとめ

以上をまとめると，TATとロールシャッハ・テストの映し出すパーソナリティの側面に，深いとか浅いとかという点での差異はない，ということになる。もちろん両検査が特異的に光を当てるパーソナリティの領域はある。ロールシャッハ・テストの場合，それは基本的な外界認知あるいは外界への対処のあり方であり，TATの場合は人間関係の中で体験される自己および他者認知ということになろう。しかし，ロールシャッハ・テストの内容分析によって引き出された結果は，TATと一致するところが多いのも事実である。さらに，これらのことに加えて，これまでは「深い－浅い」という実に単純な二分法で語られてきた両検査であるが，この深浅をもたらす要因として，検査課題の性質と被検者のパーソナリティとの相互作用という点も視野に含めるべきであることを指摘しておく。

たった2つの事例から得られた結果をただちに一般化できないのは無論のことである。しかし，本研究のとったアプローチは，いくつかの有益な視点を提供するものであった。それは鈴木が示した見解を補強するとともに，ときには新たな知見を付け加えるという点において，意味ある作業であったと思われる。今後は，このような事例研究を積み重ねるだけでなく，量的な側面からも2つの検査の共通性，相違性を検討する工夫をしてみるのもよいであろう。

付記

鈴木睦夫先生は，投映法における反応の意味を徹底的に考えることの大切さを私たち学生につねづね説いておられました。この論文の中で私が行った考察は，先生の深く透徹した論考には到底およぶものではありません。それでも，先生が教えてくださった大切な精神はこの論文の中にしっかりと生きていると思います。あらためて先生から賜りました数々のご指導に深謝いたしますとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

文献

Blatt, S. & Lerner, H. (1983). The psychological assessment of object representation. Journal of Personality Assessment, 47(1), 7-28.

De Vos, G. A. (1952). A quantitative approach to affective symbolism in Rorschach responses. Journal of Projective Techniques, 16, 133-150.

Holt, R. R. (1977). A method for assessing primary process manifestations and their control in Rorschach responses. In M. A. Rickers-Ovsiankina (Ed.), Rorschach Psychology, 2nd ed. New York: Robert E. Klieger, pp. 375-420.

片口安史（1987）．改訂　新・心理診断法　金子書房.

Mayman, M. (1977). A multi-dimensional view of the Rorschach movement response. In: Rorschach Psychology, ed. M. Rickers-Ovsiankina. Huntington, NY: Krieger, 229-250.

鈴木睦夫（1997）．TATの世界 ―物語分析の実際．誠信書房.

鈴木睦夫（2002）．TAT　―絵解き試しの人間関係論．誠信書房.

高瀬由嗣（2006）．ロールシャッハ・テスト記録のデータベース構築．平成16～17年度科学研究費補助金（基盤研究(c)）研究成果報告書.

高瀬由嗣（2008）．ロールシャッハ・テストとTATの関係．明治大学心理社会学研究，3，1-13.

田中富士夫（1996）．査定情報の総合と伝達（田中富士夫編著，[新版] 臨床心理学概説，第6章，北樹出版，82-91）.

Urist, J. (1977). The Rorschach test and the assessment of object relations, Journal of Personality Assessment, 41(1), 3-9.

(受理年月日　2012年7月13日)